

大学生の生活空間構造と大学文化への社会・文化適応(Ⅱ)¹

— 卒業留年の予測因としての1年次の生活体制 —

Lifespace Structures of University Students
and Socio-cultural Adjustment to University Culture (Ⅱ)
: The life structures in a freshman year as the predictor
of failure in graduation

弘前大学保健管理センター 豊 嶋 秋 彦

(1989. 10. 20 受理)

I 問題と方法

I-1 問 題

I-2 対象コホートの修学動向とその全国的位

I-3 分析方法

Ⅱ 外的属性ならびに教養部取得単位数と卒業留年

Ⅲ 入学直後の生活体制と卒業留年

Ⅲ-1 卒業留年の関連変数からみた生活体制

Ⅲ-2 群別因子分析からみた生活体制

Ⅳ 教養部終了時点の生活体制と卒業留年

Ⅳ-1 卒業留年の関連変数からみた生活体制

Ⅳ-2 群別因子分析からみた生活体制

V 総合的考察

I 問題と方法

I-1 問 題

大学生がそのかわり対者や組織との間でとり結ぶ機能関連のあり様と過程を、適応を鍵概念として分析・理解することを目指す「大学生学」にとって、人がそこに在籍し、そこを通過していく

1. 本研究の予測因の分析に使用したデータは昭和59～61年度文部省科学研究費の補助によるプロジェクト(一般研究・C 59510040)によってえられたものであり、当該プロジェクトの共同研究者である本学教養部・芳野晴男、教育学部・清 俊夫、東北大学医学部(現 同医療技術短期大学部)・細川 徹の諸先生に感謝申し上げます。また本稿のⅡ及びⅣ章は第25回全国大学保健管理研究集会(1988. 10)、Ⅲ及びⅤ章は第25回全国大学保健管理研究集会東北地方研究集会(1988. 7)で、夫々1部を発表し、また、それを含めた総括の1部を第10回大学精神衛生研究会(1989. 2)で発表したが、本報告はそれらに全面的な再分析と補正を施したものである。

ことによってはじめて「大学生」たりうる大学組織と、そこでの公的な価値体制～大学文化との間で人が形成する関係性の解明は基本的課題となるし、更にその解明は学生援助にとっても基本的前提となる。本研究は、大学組織に非明示的ながらも公的に存在し¹⁾、かつ、学生文化においても、そして、子弟を学生として送り出してきた家族においても、ますます主流をなす規範²⁾として顕われてきた「ストレート卒業」に対する、社会－文化非適応としての卒業遅延の予測因を、後に卒業留年に陥る群と後にストレート卒業していく群との間で教養部期（1年次）における諸反応・諸属性を比較することを通して、生活空間構造・生活体制として提出することを目的とする。

さて先行の留年研究は多くが教養部留年を対象としており、卒業遅延の研究は少ない。この背景には、1960年代後半の国立大学教養部における大量留年現象が事例化して研究が喚起されたこと³⁾、大量の卒業遅延も教養部留年の当然の帰結かそうでなければ、高橋（1989）の指摘するように、「横割り」制度の截然としない「縦割り」大学で、教養部制度があれば教養部留年として事例化した筈の現象の遷延と見做せること、教養部をストレートで通過した学生は学部・学科・研究室・専攻に分属するために、仮に全学規模の卒業遅延が多数にのぼっても学生援助担当者の視界に大量性が入りにくくなること、といった要因があると考えられる。このように卒業遅延は教養部留年に比べ、大数の水準では事例化されにくい現象なのである。しかし、実践を目指す応用技術学であると同時に、むしろそれ以前に、事実認識学である「大学生学」にとって、大学からのアウトプットの失敗としての社会－文化非適応たる卒業遅延は、その大量性の如何にかかわらず重要なトピックとして浮上する。とはいえ、我々のフィールドである弘前大学における卒業遅延の頻度と他国公立大学のそれとを対照して、本研究の知見が平均的大学の留年現象の知見なのか特殊なそれなのかを見当づけることは必要であろう。その作業は次節で遂行される。

では先行研究の知見はどのようなものであろうか。卒業留年と単位取得状況の関連性の研究には福井大学工学部学生に関する高橋（1982）があるが、豊嶋（1988b）の指摘した通り、成績－単位こそが留年の決定因であるからこのアプローチは実践的意義の豊かさに比して大学生学・学生心理学への貢献に乏しいと言わざるをえない。

それに対して、卒業留年群と非留年群の入学時データを比較した京都大学学生懇話室の一連の研究は、「列举－総和的接近」（豊嶋 1989b）に拠るものの、留年予測因の探索として興味深い。ここでは先ず梶中（1971）が、入試成績や大学入学時における将来展望・家庭状況・性格の自己評定などでは両群に差を見出せず、唯一、近畿出身者で留年が多く関東出身者で少ないことを見出した。次いで藤井ら（1975）は、梶中と類似の知見として、出身県では差がないが通学圏が京都府下の場合、留年が防止され易いことを見出し、更に、入学時の心理的諸属性においても、留年群が非留年群に比べ入学時に過剰防衛的・支配的・孤立－内閉的・おおまか・空想的、人文系読書への関心がやや強、専門職志向やや強、高校時の出席状況自己評定が不良などの特徴をもち、更に、1年次の単位取得状況も不良であることを見出し、その続報（1977）では、同じ対象者を非留年群、1留群、長期留年群に三分割して、非留対留では差が少なかった入学時の生きがい領域について、長期留年群は非留及び1留群に比べ、文系で学業と課外活動を、理系では高校期成績と友情を夫々あげる者が多いことを示した。また福井大学工学部4年生を対象とした高橋は、留年決定者（4回生で卒論着手を認められなかった者＋5回生以上）は入学時UPIにおいて、気分の波・気疲れ・被害的受取を多

く訴えることを示し(1979), 次いで, 入学時の自己実現尺度の分析から, 留年既定の4回生は高い自己受容と低い強迫性によって非留年者から判別でき, 5回生以上, 即ち長留者は, 低い達成志向(これは外部規範にとらわれない自己実現傾向の高さを意味する)・非卒直性・生き方の積極性によって非留年者及びまたは(and/or)留年既定の4回生から判別できることを明らかにして, 留年回避を含めて大学で自らの生活を律するためには“的確な外部規範の考慮と適度な強迫傾向が求められる”と結んでいる(1989)。

以上のうち性格やUPIの知見は, 生活空間構造・生活体制の解明を課題とする大学生学にとって二次的であるが, 京大における, 高校期の不良な修学状況・遠隔地出身又は府外からの通学・専門職志向が卒業留年を促進し, 「生きがい」領域も卒業留年に関連するとの知見や, 福井大における, 外部規範への非・無適応と低い強迫性, 生き方の積極性が卒業留年を特徴づけるという知見は, 生活体制そのものに関するデータとして貴重である。なお, 遠隔地出身一府外通学の要因は学習院大学における自宅通学生に男女ともに留年者が少ないとの知見(菅野 1981)にも符合し, さらに強迫性に関しては, Astin, A.W. (1976) の, 決まった時間に毎日ホーム・ワークをやる等の学業習慣がドロップ・アウトを抑制するという指摘や, 菅野(1981)の, 女子大学生で「テスト不安 test anxiety」に基く勤勉さが留年の歯どめになるとの考察とも軌を一にするであろう。

予測因を求めるという方法ではなく, ある時点での全学生の資料を5回生以上と非留年者に分割して比較した「列举一総和的」研究としては広島大学生を対象とした上地ら(1982)があり, そこでは, 留年者の最も著しい特徴として“出席不良(「登講拒否」)”が見出されたほか, 勉強への専念困難, 大学・学科への不適応感, 両親との葛藤, 友人・教官との個人的関係の保持と支えの存在, 等も留年者の特徴とされた。このうち両親との葛藤, 教官との関係の二者は, 夫々, 留年の結果としての, 亀裂や個人的接触の改善と解釈されている。

他方, 鳴澤ら(1979)は都立大学の卒業留年者に対して「因子的一類型的」接近を試み, 因子分析によって「大学生活謳歌(順応)型積極的留年」「課外活動への不満発散」「勤労学生タイプ」「大学入学・目標達成一息切れ型留年」「不満足入学一しらけ(あきらめ)型留年」「大学不適応一孤立型留年」「拘束願望受身的順応(自主性欠如)」の7型をえた。これは留年生の生活空間構造の数量的な類型化として貴重であるが, 非留年生の因子との対照によって留年者における構造は一層明確になろう。

事例法に基く「全体的一類型的」接近に属するものとしては榎本(1978)があるが充分とはいえない。それに対して, 卒業留年を含め「進路に疑問をもったり, 勉学意欲を低下させたり, 授業にたびたび欠席したり, 成績不振に陥ったり, 留年したり休学したり退学したりする」(岩村 1979, p56)学業非適応一般の発生構造を広島大学学生相談室の来談事例によって総括した岩村(1977)が提出した<不適応化の構造>は卒業留年の発生類型のひとつと位置づけることができる。即ち<A. 大学・学部への不一致・不満>から<B. 意欲低下>及び<C. 授業軽視><D. 他活動(サークル・アルバイト等)への集中>へ, そして, A~Dから<E. 不勉強・理解困難・成績不振・留年>へ, という“不適応化の中心の流れ”と, それと共に, EからB・Aへという“逆の流れ”が存在するとした。

表 1. 弘前大学昭和 59 年度入学生における公的非適応の予測因 (豊嶋 1988b)

領 域	生 活 体 制		
	入学直後まで	夏休み直前まで	1 年次終了時まで
学 業	高・大学を通じた消極的構え。	講義の理解困難と予復習なし。	教養・学部双方の学業へ研究への消極的構え。
クラブ・サークル		これまでの弱い関与と今後への弱い意欲。	
交 友	高校期交友への弱い関与。		縦の人間関係（対教師・先輩）のとりにくさ。
他	遊びを中核にした高校期。		
家 族	疎い交流と準拠困難。		
生き方・自己		生き方確立への関心と、生き方の明確化。	
進路・不本意感	無目的進学。 偏差値重視の選択。		
	大学不本意感。	総合的な（地域、大学・学部・学科）不本意感。	
			再受験志向。
		不明確な卒後イメージ。	
全 体	不良な人格適応感。	生き方と学業・卒後イメージの間の弱い関連。	不良な人格適応感。 「縦不適応」。
		今後の人格適応達成展望のえにくさ。	

表 2. 逐次重回帰分析による教養部総取得単位数の予測変数 (豊嶋 1988b)

領 域	予 測 変 数		
	入 学 直 後	夏休み直前まで	1 年次終了時点
学 業	高校学業への関与度 (+)		
	講義出席意欲 (+)	対講義一出席度 (+) 対講義・適応感 (+) 専門準備度 (-)	語学予復習 (+) 前期試験成功意欲 (+) 次年度講義適応予想 (-)
高 校 ク ラ ブ	高校・クラブ関与度 (+)		
大 学 サ ー ク ル	大学サークル関与意欲 (-)		関与度総括・サークル (-)
交 友	高校・交友関与度 (+)		友 人 数 (-) 関与度総括・交友 (+) 次年度対先輩交流意欲 (+) " 対後輩 " (-)
	高校・遊び関与度 (-)		関与度総括・遊び (-) 同 上 ・アルバイト (-)
家 族	交 流 意 欲 (+)		交 流 意 欲 (+)
生 き 方 ・ 自 己	高校・生き方確立への関与度 (-)	生き方・考える時間 (-)	関与度総括・生き方確立 (-)
	自 己 肯 定 (-)		
進 路	適性 vs 偏差値 (+)		
	大学満足感 (-)		
	学部満足感 (-)		

注 (+) 総取得単位数に順機能的予測性をもつ変数。

(-) " に抑制的・逆機能的予測性をもつ変数。

一方、先述の通り卒業留年は遷延された教養部留年とも見做される。特に我々のフィールドたる弘前大学では、教養部は1年制で、文系20単位・理系24単位で学部に進学（「移籍」と称する）でき、しかも必修外国語が1科目4単位に過ぎぬという特殊な学制のため、他大学なら教養留年に陥る学生でも容易に教養留年を回避できるから、卒業留年は遷延された教養部留年としての側面を強くもつであろう。藤井ら(1975)、岨中(1981)も類似の考察を行なっている。即ち、藤井は「教養部留年のさらに集約化・純粋化したもの」、岨中は「教養部留年の延長上に教養課程ではまだ顕在化しなかった問題の顕在化」したものと卒業留年を捉える視点を提示した。そこで本研究の対象コホートについて、取得単位数が教養部の公的期待下限に達しなかった「公的非適応群」（極く少数の教養部留年者⁴⁾も含まれる）における生活体制の特徴（表1、豊嶋 1988b）や、1年間の総取得単位数の予測変数（表2、同上）が、卒業留年の予測因としても成立するという仮説を検証することも本研究の二次的目的となる。

1-2 対象コホートの修学動向とその全国的位置

図1は対象コホートである昭和59年度の弘前大学4年制学部入学者960名の4年間の修学動向である。ストレート卒業者は798名（全入学生の83.1%）、卒業遅延者は129名（13.4%）だが、教養部留年による遅延者や身体的疾患のための休学による遅延者は、卒業留年をもたらす生活空間構造・生活体制をさぐる本稿の目的から逸れるので別枠とし、また、学部期に海外留学した10名は次の二点から他の卒業留年とは異質なので別枠とした。その第一は、留学留年者は教養部期において他の事由による卒業留年者に近い特徴ももつが、教養部期にすでに専攻研究（語学や外国文化が多い）や教官、先輩・後輩との関わりにおいて、他の留年者はおろか非留年者よりはるかに積極的であり、かつ、必修外国語単位数も両者より多いというポジティブな生活体制をみせており（豊嶋 1988a）、しかも、これら特質は、「学業～研究への消極的構え」「縦の人間関係（対教師・先輩）のとりにくさ」という教養部期の公的非適応（即ち、不良な単位取得状況）群の特徴とまったく逆のものである点であり、その第二は、10名の過半が、大学の国際交流方針に従った米国の某州立大学への公的

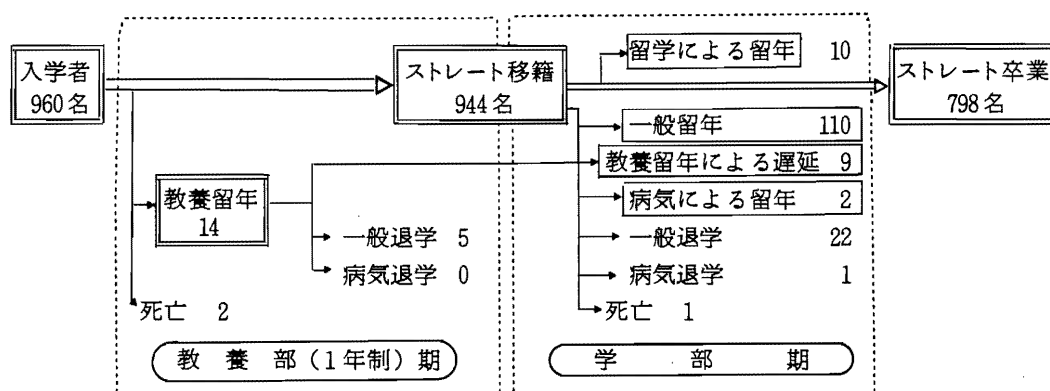


図1. 昭和59年度弘前大学4年制学部入学者の修学動向

留学生であったり、筆者が教養部期からかかわった成長志向の留学生である点である。要するに留学留年群は非留年群をもつきぬけた積極的學生であることがわかっているので別枠とした。他方、精神疾患のための休学に基づく卒業遅延は、病氣留年のカテゴリーには入れない。身体疾患による遅延とは異なり、生活空間構造や生活体制との関連で休学や遅延が促がされたり回避できると解されるからである。

こうして、教養部留年者・身体的疾患及び留学による遅延者を除き、精神疾患による遅延者を含む110名（全入學生の11.5%）の「一般留年」者の教養部期の特徴的生活空間構造を説明することが、本稿の目的となる。なお、以下の記述で「卒業留年」とは、この一般留年を指す。

さて、13.4%の卒業遅延率は梶中（1981）による昭和54年3月卒業予定の全国4年制大学卒業遅延率13.0%とほぼ同じで、国立大学のみでの20.4%よりも少ないが、梶中の数値は標準として古い。そこで昭和59年度大学入學者に関する文部省調査によってこのコホートの脱落率を算出してみた（表3）。卒業遅延率を求めるデータを未入手なので、退学・除籍を含めた脱落率で代用させる。典拠は表3の脚注に示す。典拠たるaとbには入學者数にちがいがみられるがbを優先させた。しかし、bは4年制以外の学部・科（医・歯・商船・獣医・Ⅱ部）をコミにした入學者数しか明らかにしていないので、それら学部・科の入學者は

aにより、かつ、aでも不明な獣医学科については入学定員を入學者数と見做す、という操作を行なったので推定にとどまる。これによれば弘前大学4年制学部の脱落率16.9%は全国立大学平均をやや下まわるが概ね平均的位置にあるといえよう。

以上、教養部学制こそ特殊なものの、弘前大学の卒業遅延率や脱落率は全国の平均的水準かそれをやや下まわるものと考えられる。

表3. 昭和59年度国公立大学（4年制）
入學者の推定脱落率

	①59年度 入 学 者	②ストレート 卒 業 者	脱 落 者 (①-②)	脱落率
国立	80,152名	64,675名	15,477名	19.3%
公立	9,913	8,018	1,895	19.1

①「昭和59年度国公（私）立大学入学志願状況調べ」（典拠a）及び「昭和59年度学校基本調査速報（高等教育）」（典拠b）（ともに文部省）による推計。

②「昭和63年度学校基本調査速報（高等教育）」（典拠c）（文部省）による。

1-3 分析方法

1) 分析資料 昭和59年度弘前大学入學者に対して入学直後から4年次まで計6回実施した適応状況に関する追跡的質問紙調査⁵⁾の資料のうち4年制学部學生の入学直後調査と教養部終了直前（期末試験直前）調査の資料を使用する。両調査とも教養部心理学講義（新入生の74.0%が登録）の時間中に実施された。質問紙は、調査時点における過去・現在・未来の、學生生活の主領域に対するかかわりや意欲、全体的人格適応感（「総括的適応感」と呼ぶ；それまでの主領域への関与を問うたのちに設問される“要するにこれまでの學生生活はうまくいきましたか”という問への反応を尺度とした）、生活空間構造の統合軸としての生き方—人生指針確立行動への関与度と確立感、進路展望などを問う5段階評価項目（否定的反応ほど高得点を与えた）のほか、外的変数や傾注活動・準拠

集団・全体的人格(非) 適応感の主観的理由などを問う選択式項目や自由記述項目から構成されるが、項目の内容・編成は調査時点の時期的特質に対応して異なる。即ち入学直後調査では入学以前の諸領域へのかかわりの回顧と学生生活への展望が、教養部終了時調査では1年間の学生生活でのかかわりの回顧と次年度(学部期)への展望が、夫々中心的に問われている。質問紙の具体的内容は紙幅の都合で豊嶋ら(1987)にゆずり、ここでは五段階評定項目の一覧を表4に示すにとどめる。

入学直後調査の有効回答者は707(4年制学部入学者の73.6%)で、うちストレート卒業者は616、卒業留年は78、夫々、ストレート卒者全体の77.2%、卒業留年者全体の70.9%に当る。教養部終了時調査における有効回答者は580(その時点での在籍者の60.5%)であり、うちストレート卒524、卒業留年49、夫々母集団の65.7%、44.5%になる。

表 4. 五段階評定項目一覧

4-1 入学直後調査の五段階評定項目

No	項 目		No	項 目	
1	高校・受験期への回顧	進 学 目 的 明 確 度	21	適 応 感	生 き が い ～ 充 実 感
2		高・受験期における関与度の総括	22	フへの展望・マール・領域意欲	総 括 的 適 応 感
3			23		学 業 へ の 意 欲
4			24		対 講 義
5			25		魅 力 度 の 予 想
6			26		学 力 面 の 自 信
7			27		出 席 意 欲
8		高 校 生 活 の 余 裕 感	28		専 門 研 究 の 準 備
9		高 校 生 活 の 満 足 感	29		対 教 官 交 流 意 欲
10	生き方・自己・進路	生 き 方 ・ 人 生 指 針	30	インへの展望・マール・領域意欲	サ ー ク ル 関 与 意 欲
11			31		友 人 幅
(12)			32		友 獲 得 意 欲 積 極 性
13		自 己 省 察	33		対 先 輩 交 流 意 欲
14		自 己 肯 定	34		対 交 友 適 応 予 想
15	所属満足感	適 性 vs 偏 差 値	35		対 家 族
16		大 学 へ の 満 足 感	(36)		交 流 意 欲
17			(37)		適 応 予 想
18			38	全体的展望	交 流 意 欲
19			39		適 応 予 想
20	地域への満足感	再 受 験 意 思			全 体 的 適 応 予 想
		地 域 へ の 満 足 感			卒 後 進 路 明 確 度

・項目Noに()を付した項目は1部の者にのみ設問。

4-2 教養部終了時調査の五段階評定項目

No.	項 目			No.	項 目		
1	所 属 満 足 感	大 学 へ の 満 足 感	大 学	30	入 学 後 一 年 間 に お け る 関 与 度 の 総 括	出 席 行 動	
2			学 部	31		学 業	
3			学 科	32		サークル活動	
4			転 部 科 意 思	33		交 友	
5			再 受 験 意 思	34		生 き 方 確 立	
6		地 域 へ の 満 足 感	35	遊 び ・ 趣 味			
7	フ ォ ー マ ル 領 域 へ の 回 顧	対 講 義	魅 力 度	36	ア ル バ イ ト		
8			適 応 感	37	適 応 感	支 え 集 団 の 発 見 感	
9			出 席 度	38		生 き が い ～ 充 実 感	
10			語 学 予 復 習	39		総 括 的 適 応 感	
11	専 攻 準 備 度		40	現 在 の 全 体 的 適 応 感			
12	前 期 テ ス ト 成 功 感	41		学 業 へ の 意 欲			
13		後 期 テ ス ト の 自 信		42	対 講 義	魅 力 度 の 予 想	
14		対 教 官 交 流 度		43		学 力 面 の 自 信	
15	サ ー ク ル 関 与 度		44	出 席 意 欲			
16	イン フ ォ ー マ ル 領 域 へ の 回 顧	ク ラ ス ・ 寮 活 動		45	対 教 官 交 流 意 欲		
17		友 人 交 流	積 極 度	46	ゼミ集団との交流意欲		
18			幅	47	研 究 意 欲		
19		対 先 輩 交 流 度		48	サークル関与意欲		
20		対 友 人 適 応 度		49	新 友 人 獲 得 意 欲		
(21)		止 宿 先	適 応 感	50	対 先 輩 交 流 意 欲		
(22)			交 流 度	51	対 後 輩 交 流 意 欲		
23		対 家 族	適 応 感	52	対 友 人 適 応 予 想		
24			交 流 度	(53)	止 宿 先	交 流 意 欲	
25		生 き 方 ・ 自 己	生 き 方 ・ 人 生 観	考 え る 時 間		(54)	適 応 予 想
26	確 立 感			55	対 家 族	交 流 意 欲	
(27)	生 活 納 得 感			56		適 応 予 想	
28	自 己 省 察	57		生 き 方 ・ 自 己 の 確 立 意 欲			
29		自 己 肯 定	58	全 体 的 適 応 予 想			
				59	卒 後 進 路 明 確 度		

・ 項目No.に () を付した項目は1部の者のみに

・項目Noに()を付した項目は1部の者のみに設問。

2) 分析手続 卒業留年の教養部期における予測因を探るために次の分析がなされる。

1. ストレート卒業群（以下「卒業群」）と卒業留年群（以下「留年群」）の比較 両調査の五段階評定項目における平均値比較と、学部別・性別・現一浪別・出身地別通学形態（止宿先）別といった外的属性の度数比較とが行なわれる。なお比較に際しては、ストレート卒業－卒業留年の関連要因を広く探る目的から10%水準の傾向差も拾っていく。

2. 両群の分化要因を求める多変量解析 変数（項目）間の相互作用を考慮に入れた場合に重要となる項目を探るために、卒業群に1点、留年群に2点を割当てた二つの解析を行なう⁷⁾。第一は、卒業－留年を目的変数とし、一部の者にのみ問うた表4のNo列が()の項目を除く、五段階評定項目への反応を説明変数とした逐次重回帰分析である⁸⁾。ここでも導入・除去の基準を10%に抑えた。第二は両群の判別分析であり、判別係数の絶対値が相対的に大きい変数が拾い出される。なお、重回帰式や判別式そのものに本稿の関心はない。そもそもそれらは計算に入れる変数の出入に応じて可変的なアーチファクトに過ぎぬからであり、本稿の目的は卒業－留年に予測的関連をもつ項目と、それによって指し示される予測因としての学生のかかわり体制を探ることにあるからである。

3. 両群の1年間の取得単位数比較 このコホートの1年次単位取得状況は公式記録調査によってわかっているのだから群間比較と判別分析を行なう。但し前述の通り、単位によってのみ決定する卒業－留年の予測因として単位を分析するのはトートロジーに過ぎない。あくまでも補足的分析に留まる。

4. 群別因子分析 留年群の因子の検討よりも卒業群の因子との比較が留年要因を鮮明にする。群別に主因子法バリマックス回転の因子分析を施し、両群の因子内容・構造の異同が検討される。但し両群の資料数が入学直後調査で約8:1、教養部終了時で約11:1とひらいているために、卒業群を一定間隔(1/10)でサンプリングした資料にも因子分析を行ない原群の因子と対照して安定性を確かめる。もし卒業群の因子とサンプリング資料の因子とが類似していれば、卒業群と留年群の間の因子の相違は、事例数のちがいに基くものではなく卒業－留年に予測的関連をもつ生活体制差による可能性がより大になろう。

I 外的属性ならびに教養部取得単位数と卒業留年

本章では生活空間構造や生活体制との関連性が比較的薄い外的属性と生活体制そのものの帰結にすぎない取得単位数とを、両群間で比較してみる。なお外的属性のうち学部と性のみは全入学者についてわかっているので全入学者について比較し、他の属性と単位については、事例数の多かった入学直後の有効回答者で比較した。但し、止宿先は時期によって変わってくるので両調査のデータを調べた。比較結果は表5(1～5)・表6に示す。

学部別では人文学科と農学部は留年群が多く教育学部は少なく、性別では男子に多く女子に少ない。教育学部の留年卒の低さは女子が多いこと(63.0%)と職業志向の強さによると解されるが、やはり女子の多い(43.1%)人文学科の留年率の高さは特異である。豊嶋ら(1989a)は積極的モラトリアムの学生が入学直後においても4年次になっても人文学科に多いことを明らかにしたが、就職に不利なこの学科をあえて選択した教養志向と、それに密接に関連するであろう積極的モラトリ

表 5. 外的属性と卒業留年

5-1 学 部

	卒 業	留 年	計	$\chi^2(df=1)$
人 文	90 (11.3%)	23 (20.9)	113	8.22 **
文 経 済	142 (17.8)	15 (13.6)	157	n.s.
教 育	330 (41.4)	27 (24.5)	357	11.44 ***
理	131 (16.4)	21 (19.1)	152	n.s.
農	105 (13.2)	24 (21.8)	129	5.94 *
全 体	798 (100)	110 (100)	908	(df3) 20.63 ***

5-2 性

	卒 業	留 年	計	$\chi^2(df=1)$
男	478 (59.9)	94 (85.5)	572	27.08 ***
女	320 (40.1)	16 (14.5)	336	
全 体	798 (100)	110 (100)	908	

5-3 出身地

	卒 業	留 年	計	$\chi^2(df=1)$
青 森 県	284 (46.1)	28 (35.9)	312	2.91 °
東 北 圏	157 (25.5)	16 (20.5)	173	n.s.
他 北 海 道	91 (14.8)	16 (20.5)	209	n.s. } 7.58 **
関 東 以 西	84 (13.6)	18 (23.1)		
全 体	616 (100)	78 (100)	694	(df2) 7.58 *

5-4 現一浪 一大検, 大学既卒を除く一

	卒 業	留 年	計	$\chi^2(df=1)$
現 役	418 (68.2)	56 (72.7)	474	n.s.
一 浪	157 (25.6)	19 (24.7)	176	n.s.
多 浪	38 (6.2)	2 (2.6)	40	n.s.
全 体	613 (100)	77 (100)	690	(df2) n.s.

5-5 止宿先

	入 学 直 後				教養部終了時 — NA者を除く一			
	卒 業	留 年	計	$\chi^2(df=1)$	卒 業	留 年	計	$\chi^2(df=1)$
自 宅	135 (21.9)	13 (16.7)	148	n.s.	113 (21.8)	9 (18.4)	122	n.s.
下 下 宿	131 (21.3)	14 (18.0)	344	n.s. } n.s.	133 (25.6)	7 (14.3)	304	3.16 ° } 3.47 °
宿 アパート	181 (29.4)	18 (23.1)			151 (29.1)	13 (26.5)		
寮	169 (27.4)	33 (42.3)	202	7.42 **	122 (23.5)	20 (40.8)	142	7.15 **
全 体	616 (100)	78 (100)	694	(df2) 7.44 *	519 (100)	49 (100)	568	(df2) 7.22 *

° $P \leq 0.10$, * ≤ 0.05 , ** ≤ 0.01 , *** ≤ 0.001 .

表 6. 1 年次の取得単位と卒業留年

— 入学直後調査の有効回答者について —

単 位 数	卒業群 (N=616)		留年群 (N=78)		t	判別係数 ⁴⁾⁵⁾
	\bar{x}	SD	\bar{x}	SD		
一般教育科目	36.0 単位	5.9	29.5 単位	6.5	9.18 ***	+ 0.0059
必修外国語 ¹⁾	4.0	.7	3.7	1.4	2.74 **	+ 0.0040
他 外 国 語 ²⁾	3.2	1.1	2.2	1.2	4.43 ***	+ 0.0038
他 ³⁾	3.1	.7	3.2	1.6	n.s.	- 0.0066
総取得単位	44.8	6.7	37.4	7.6	8.99 ***	

** $P \leq 0.01$, *** ≤ 0.001 .

1) 4 単位必修。 2) 非必修。取得者 (卒業群で 330, 留年群で 39) のみの数値。

3) 保健体育科目 (3 単位必修) と特設科目からなる。 4) + は卒業, - は留年の促進要因。

5) 判別得点の \bar{x} は卒業群で +0.0048, 留年群で -0.0383。t=9.45, $P < 0.001$ 。

アム志向とが、人文学科の高い留年率をもたらすと解しうる。

現一浪別という入学経過に群間差は認められなかった。

出身地では県内出身に留年群が少なく、東北地方の圏外、特に関東・中部以遠に多い。

止宿先では、両調査時点ともに寮居住者が留年しやすく、寮生でも自宅生でもない群（下宿・アパート居住者）は入学直後では留年との関連が認められないが、教養部終了時になると留年しにくくなる傾向が見出された。両調査時点の間で、自宅生は全サンプルの21.3%→21.5%で不変なのに対して、寮生が29.1%→25.0%と減じ、この群が49.6%→53.5%と増えていることから、寮生活で何らかの非適応を感じた層が1年の間に寮から下宿等に転じたと考えられ、教養部終了時におけるこの群の非留年傾向は、かかる「元」寮居住者が、留年を生じやすい寮生活から脱出できたことによってもたらされたものであろう。

1年次取得単位では、「保健体育科目+特設科目」（表6における「他」）では差がないが、一般教育科目、必修外国語、他外国語のいずれでも留年群は有意に少ない単位数に留まっている。特に、教養部の設置目的の焦点がそこにある一般教育科目と、本学では自由選択ながらも他大学では最も大学生らしい苦業とみなされがちな他外学国語とにおける著差は、留年群が＜大学教養部の本来の公的雰囲気＞に適応できなかった層であることを示唆する。なおこの4変数で判別分析を試みると、留年群の71.8%、卒業群の72.6%を判別できる判別関数がえられたが、判別係数は「他」がマイナスになる。即ち、一般教育科目や外国語科目の単位数が等しい学生で留年-卒業の分岐点に近い程度の低単位数の学生の場合、保健体育科目又は特設科目の単位数が多いほど留年に至るのである。ひとつには、特設科目をあえて履修するほどに大学文化に過剰適応したための卒業留年と、次に、一般教育や外国語といった主科目への出席や修得状況が悪いにもかかわらず保健体育科目や特設科目だけは単位がとれているといった大学文化の周縁に対する適応による卒業留年とが考えられよう。

Ⅲ 入学直後の生活体制と卒業留年

Ⅲ-1 卒業留年の関連変数からみた生活体制

卒業群と留年群の間で平均値差が見出されるか、又は、逐次重回帰分析で有意となった項目のみを表7に示した。平均値差はすべて留年群がよりネガティブな反応になっているが、逐次重回帰分析では「自己省察」「自己肯定（自己省察した結果あらわれる自己が好きか嫌いかを問うた）」「専門研究の準備（次年度以降に専攻する予定の領域の準備や研究を、1年次のうちからやりたいかどうかを問うた）」の3項目において、ポジティブな反応ほど留年を促進する逆機能的関連が見出される。但し、重相関係数は有意とはいえ.247にとどまる。

判別分析の結果は、表8の通りである。絶対値の上位10項目に便宜的に注目すると、先の分析で拾い出された項目に加えて、新たに「11. 生き方確立感」「32. 対先輩交流意欲」「38. 全体的適応予想」の3項目が留年の関連変数として浮上する。このうち「32」は交流意欲が強いほど留年が促される逆機能的関連を示す。残る7項目の予測性の方向（即ち、卒業に対して逆機能が順機能か）は表7の分析で見出された方向と同じである。

表 7. 入学直後調査による平均値比較と逐次重回帰分析

No	項 目	平 均 値 比 較						逐次重回帰分析	
		卒 業 群			留 年 群			[n=619, R=.247**]	
		n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	t (差の方向)	std. B t
1.	進 学 目 的 明 確 度	613	2.04	1.05	77	2.26	1.19	○ (→)	
5.	高校期間と度：交 友	610	2.04	.87	78	2.23	1.15	○ (→)	-.105 **
10.	生 き 方：考 える 時 間	616	3.15	1.15	78	3.42	1.13	○ (→)	
13.	自 己 省 察	615	2.34	.97	78	2.31	.98		+.073 ○
14.	自 己 肯 定	609	3.20	1.10	73	3.03	1.12		+.073 ○
24.	対講義：魅力度の予想	615	2.68	.83	78	2.89	.94	* (→)	-.087 *
27.	専 門 研 究 の 準 備	615	2.24	1.03	78	2.12	1.04		+.087 *
30.	友 人 獲 得 意 欲：幅	615	1.37	.75	78	1.56	1.03	* (→)	
34.	対家族：交 流 意 欲	614	2.02	.88	78	2.44	1.06	*** (→)	-.097 *
35.	〃 : 適 応 予 想	614	1.96	.84	78	2.27	.92	*** (→)	
39.	卒 後 進 路 明 確 度	614	2.34	1.28	76	2.91	1.50	*** (→)	-.130 **

注・No 表 4-1 の項目番号に対応。

・ \bar{x} 高得点ほど消極的・非適応的反応になる。

・「差の方向」, 及び「std.B」の正負 プラスはその項目への積極的・適応的反応ほど留年を予測させ、マイナスはその項目への消極的・非適応反応ほど留年を予測させることを示す。

・○ $P \leq 0.10$, * $P \leq 0.05$, ** $P \leq 0.01$, *** $P \leq 0.001$ 。

以上の三つの分析が拾い出した項目について、生活空間領域の異同という枠組に沿ってまとめると、卒業遅延を入学直後時点で予測させる要因として次の諸項が括りだされる。

1. 「34. 対家族交流意欲」「35. 対家族適応予想」より、家族との不良な関係。平均値比較も判別分析もこの2項目にネガティブな反応を与えるほど卒業留年に結果することを示している。どちらが相対的な予測性が大であるかは、判別係数は両項目間で差が小なこと、逐次重回帰分析において前者が拾い出されたことから、「34」が大と捉えたい。入学時における家族との交流を忌避する構えが留年をもたらすのである。
2. 「1. 進学目的明確度」「39. 卒後進路明確度」「38. 全体的適応予想」より、将来展望や生き方と進路展望の不確かさ。「1」と「39」は判別分析では係数が相対的に小さく、逆に、「38」は判別分析のみで拾われた項目であるが、いずれにしても近未来ではない将来の、全体的なあり方・生き方への確かな展望を作りにくいほど留年がもたらされやすいことを示している。更に、「10. 生き方・人生指針を考える時間（これまでそうした時間をどの程度とれているかを問うた）」では、留年群がネガティブな反応を示す。判別分析では「10」よりも「11. 生き方・人生指針の確立感」の方が強い予測性をもつが、いずれにしても、入学直後時点までに生き方確立行動に関与し確立しているほど留年は生じにくいのである。
3. 「5. 高・受験期の交友への関与度」「30. 友人獲得意欲－幅（大学で多くの友人を作りたいかを問うた）」より、高校期から一貫した交友意欲の乏しさ。但し判別分析では「32. 対先輩交流意欲」が強いほど留年に至りやすい。「5」「30」は判別分析でもネガティブな反応が留年を予測

表 8. 入学直後調査による判別分析結果

No	項 目		判別係数 ×100	順 位	No	項 目		判別係数 ×100	順 位	
①	高校へ受験期への回顧	進 学 目 的 明 確 度	- .62		21	適 応 感	生 き が い ～ 充 実 感	+ .00		
2		高・受験期における関与度の総括	受 験 準 備	- .11	22	フへの展望・領域欲	総 括 的 適 応 感	+ .00		
3			学 業 自 体	+ .72	23		学 業 へ の 意 欲	+ .75		
4			ク ラ ブ ・ ク ラ ス	+ .05	②4		対 講 義	魅 力 度 の 予 想	- 1.88	2
⑤			交 友	- 1.85	25			学 力 面 の 自 信	+ .50	
6			生 き 方 確 立	+ .70	26		出 席 意 欲	- .57		
7			遊 び ・ 趣 味	+ .33	②7	専 門 研 究 の 準 備	+ 1.11	6		
8		高 校 生 活 の 余 裕 感	+ .86		28	対 教 官 交 流 意 欲	+ .39			
9		高 校 生 活 の 満 足 感	- .35		29	サ ー ク ル 関 与 意 欲	+ .80			
⑩	生き方・自己・進路	生 き 方 生 活 指 針	考 へ る 時 間	+ .34	③0	インへの展望・領域欲	友 人 獲 得 意 欲	幅	- 2.14	1
11			確 立 感	- 1.06	31		積 極 性	+ .22		
⑬		自 己 省 察		+ 1.09	7	32	対 先 輩 交 流 意 欲	+ 1.05	9	
⑭		自 己 肯 定		+ .86		33	対 交 友 適 応 予 想	- .71		
15		適 性 vs 偏 差 値		- .36		③4	対 家 族	交 流 意 欲	- .99	10
16	所属満足感	大 学 への満足感	大 学	+ .48	③5	適 応 予 想		- 1.12	5	
17			学 部	- .88	38	全 体 的 適 応 予 想	- 1.78	4		
18			学 科	+ .96	③9	卒 後 進 路 明 確 度	- .84			
19			再 受 験 意 思	- .47	卒業群 判別得点の $\bar{x} = - 0.0046$					
20	地 域 へ の 満 足 感		+ .96		(N = 616) 判別率 70.6%					
					留年群 判別得点の $\bar{x} = + 0.0390$					
					(N = 78) 判別率 69.2%					

・Noに○を付した項目は、平均値比較・逐次重回帰分析で有意な項目。

・判別係数の正負；－はネガティブな反応ほど、＋はポジティブな反応ほど、それぞれ留年を促進する。

させる関係をもっているから、「32」の結果は“交友意欲に乏しいのに先輩への依存が強い”層ほど留年しやすいことを示唆する。

4. 「13. 自己省察（自分の性格・行動傾向・どんな人間かをこれまで充分かえりみることであったかどうかを問うた）」「14. 自己肯定」という自己とのかかわりでは、平均値差は認められないが、二つの多変量解析とともにポジティブな反応ほど留年に至りやすい関連性が見出された。但し、前者は所謂「思的的内向」や、自己省察の契機となる脅威体験をもつほどポジティブになると考えられるに対して、後者は「思考的外向」や自己省察の回避、あるいは、脅威体験を克服した自己への自信といった多様な要因によってポジティブな反応が生ずると解されるので、両項目の結果の一括にやや難がある⁹⁾。ここでは、自己省察と自己肯定を一応別の要因としておさえておく。但し、自己肯定は、自己肯定による緊張欠如が留年を生じやすいとの仮説で説明できるであろう。

なお、関連項目として設問された「11. 12. 生き方・人生指針」の結果と併わせると次の二つの留年促進要因を括り出せる。①生き方・人生指針という生活空間構造化の軸、乃至は将来展望を確立することへの関与・関心が弱いままに、性格等の“現在の自己”探索をしていく構え。石郷岡(1962, 1982)は青年を将来展望にむけて生活体制や生活空間構造を体制化していく存在と捉えているが、将来展望への関心が弱いままに自己探索することは体制化にとってむしろ否定的機能を及ぼし、そのことが卒業留年を生じやすくするのであろう。②生き方・人生指針の確立行動への関与がないままの自己肯定。

5. 「24. 対講義一魅力度の予想(教養部講義が全体としておもしろそうかどうか。『教養部講義への期待感』とも換言できる。)」より、教養部講義への弱い期待感。この項目は三つの分析ですべて同方向の予測性が認められている。
6. 「27. 専門研究の準備」より、専門研究への尚早なとりくみの構え。

以上、項目の測定対象たる生活空間領域の異同に注目して関連項目をまとめるという手法によって、入学直後における留年予測要因を考察してきたが、1～6を併記するだけでは豊嶋(1989a)が限界を指摘した「列举—総和」的接近にとどまる。そこで、二つの多数量解析に依拠して、留年に至りやすい入学直後の生活(空間)体制の全体像を素描すると次のようになる。但し前述の如くそれは分析に使用した項目の範囲内でえられたアーチファクトに過ぎず、1～6の列举より優れている保証はない。従って本章の結論は、1～6と、次の二項との併記になる。

a. 逐次重回帰分析による全体像

高校期には交友への関与が弱く家族との関係も不良。性格や行動への顧みを行なっているが、その反面、卒業進路展望は不明確である。教養部講義への関心は弱い反面、学部期に専攻する予定の領域への関心が強く1年次からその研究や準備にかかろうとする。そしてこのような生活体制をとっている自己を肯定する構えが強い。

b. 判別分析による全体像

上記aと類似の像がえられる。高校期も、今後の意欲レベルでも、交友への関与・関心が弱く家族との関係も不良であって、対人関係は全般に自我周辺的位置にとどまるが、その反面で先輩との交流意欲を示す。代償としての依存かもしれない。性格・行動への顧みを行なうが反面、生き方や人生指針は未確立であり、今後の学生生活の適応展望も作りにくい。教養部講義への関心が弱い反面で、将来の専攻の研究・準備意欲が強く1年次からそれを展開しようとする。

Ⅲ-2 群別因子分析からみた生活体制

卒業群(N=616)、卒業群の1/10 サンプル群(N=62)、留年群(N=78)それぞれの因子構造を表9に一括した。因子負荷量.4未満は正負のみ、.3未満は空欄にしてある。

卒業群の因子(I～Ⅴ)とサンプル群の因子(i～Ⅷ)をまず比較する。第一に、大学でのサークル・交友関与意欲と適応予想(項目番号29～33)のみで高い負荷量を与えた卒業群のⅠは、交友への関与意欲(30～32)と自己省察(12)が高く負荷するサンプル群のⅡと類似の内容をもつ。第二に、所属満足感(16～20)及び適応感(21～22)のみで高い負荷量をもつ卒業群のⅡは、大学・地域への満足感(16, 19, 20)とその帰結と考えられる高校期への回顧的満足感(9)及び適応感

表 9. 入学直後の因子構造（回転後）

No		項 目	ス ト レ ー ト 卒 業 者										留 年 群								
			1 / 10 サンプルング群								卒 業 群										
			I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	I	II	III	IV	V	1	2	3	4	5	6
1	進 学 目 的 明 確 度	-			+		+ .43						- .42			+ .55				+	
2	高校期の 関 与 度 総 括	受 験 準 備			+ .57	+ .42								- .73						+ .70	
3		学 業 自 体			+	+ .43								- .64						+ .75	
4		ク ラ ブ ・ ク ラ ス			- .52	+		+										-			
5		交 友			- .81						+					- .47		- .40			
6		生 き 方 確 立							- .67					- .58			+ .41			- .75	
7		遊 び ・ 趣 味			- .74									+ .41			- .59				
8	高 校 生 活 の 余 裕 感			- .45	-												- .61				
9	“ 満 足 感 ”	- .51															- .62				
10	生 き 方	考 える 時 間					- .57	- .58					- .66			+			- .53		
11		確 立 感					- .75						- .58						- .57		
13	自 己 省 察	+ .44	- .45				-						- .46								
14	自 己 肯 定					+		-				+ .48					- .66				
15	適 性 vs 偏 差 値				+ .53						-					+ .52					
16	大学への 満 足 感	大 学	- .72								- .70				- .43		-	- .59			
17		学 部	-								- .71					+		- .79			
18		学 科	-							+ .65	- .67					+		- .77			
19		再 受 験 意 思	- .66			- .41				+ .58	- .57							- .67			
20	地 域 へ の 満 足 感	- .71	-								- .43						-		-		
21	生 き が い ～ 充 実 感	- .69									- .55	+ .42			- .51			-			
22	総 括 的 適 応 感	- .78									- .42	+ .47			- .49		-				
23	学 業 へ の 意 欲	-						- .62	+			+	-			+ .56					
24	対 講 義	魅 力 度 の 予 想				+ .46		-				+			-		-		- .45		
25		学 力 面 の 自 信					+ .50					+ .50							- .64		
26		出 席 意 欲							- .49						-	+ .56					
27	専 門 研 究 の 準 備		+						+ .60				-			+ .66					
28	対 教 官 交 流 意 欲					+ .74				+			-		-	+ .78					
29	サークル関与意欲		+			+ .44				+ .59					-						
30	友 人 獲 得 意 欲	幅		+ .89						+ .77					- .84						
31		積 極 性		+ .87							+ .82					- .90					
32	対 先 輩 交 流 意 欲	-	+ .44		+	+	-			+ .81					- .88						
33	対 交 友 適 応 予 想						+ .73			+ .45		+ .48			- .61		-				
34	対 家 族	交 流 意 欲		+			+					+									
35		適 応 予 想		+			+		-				+		-		- .40			+	
38	全 体 的 適 応 予 想	-					+ .73						+ .61		- .47		- .44	-	-		
39	卒 後 進 路 明 確 度							- .61													
固 有 値		4.26	3.09	2.70	2.68	2.31	2.31	2.25	1.88	3.15	3.03	2.45	2.31	1.69	4.94	3.40	3.24	2.82	2.49	2.06	
寄 与 率 (%)		19.9	14.4	12.6	12.5	10.7	10.7	10.5	8.8	24.9	24.0	19.4	18.3	13.4	26.1	17.9	17.1	14.9	13.1	10.9	

・ +, - は因子負荷量の絶対値が .30 以上 .40 未満を示す。

・ 空白は因子負荷量の絶対値が .30 未満。

(21～22)を中心にするサンプリング群のⅠ，並びに，学部・学科満足感(17～18)とその基礎と考えられる専攻準備意欲(27)が高く負荷するサンプリング群のⅧが重合した因子と判断できる。第三に，卒業群のⅢは，大学での学業・交友の双方への明るい展望(25, 33)とそれに基く全体的適応予想(38)という楽観的将来展望の因子と見られ，内容としてはサンプリング群のⅤに一致する。第四に，卒業群のⅣはサンプリング群のⅥとⅦの重合である。最後に卒業群のⅤは高校期の受験準備活動及び勉学自体(2, 3)への強い関与と，それに対してやはり高校期の遊び・趣味(7)への弱い関与からなる因子であるが，それはサンプリング群におけるⅢ，即ち高校期における受験準備(2)への強い関与と，それに対してクラブ・クラス活動，交友，遊び・趣味(4, 5, 7)への強い関与，及び高校生活の余裕感(8)の弱さから特徴づけられる因子と，生活体制では同質性の大きな因子である。

これらは両群の類似性が大なことを示し，卒業群の因子構造は安定的である事を示唆する。但し，サンプリング群のⅣは卒業群では見出されない因子であり，また，卒業群の因子がサンプリング群では分化する(Ⅱ→Ⅰ+Ⅷ，Ⅳ→Ⅵ+Ⅶ)傾向も認められるから，卒業群と留年群の比較にあたっては，サンプリング群のⅠ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷに相当する留年群因子を留年群の特徴と見なすことを避けた上で，留年群因子の特徴を括り出せばよいことになる。

サンプリング群・卒業群・留年群それぞれの因子を解釈して因子対照表(表10)を作った。対応した内容をもつ因子を同じ行に配してある。

表10. 入学直後因子の比較

ス ト レ ー ト 卒 業 者		留 年 群
1/10 サンプリング群	卒 業 群	
Ⅱ. 交友への積極性 vs 自己省察の乏しさ	Ⅰ. 交友への積極性	1. 交友への積極性と全体的適応感
Ⅰ. 大学への満足感と全体的適応感 vs 自己省察の乏しさ	Ⅱ. 大学・専攻への満足感と全体的適応感	4. 大学・専攻への満足感
Ⅷ. 専攻満足感と専攻への意欲		
Ⅴ. 同 右	Ⅲ. 交友・学業への自信に支えられた適応感—適応予想	
Ⅵ. 卒後進路・大学進学目的の明確化を伴う生き方の確立	Ⅳ. 自己省察・大学進学目的の明確化を伴う生き方の確立	
Ⅶ. 生き方確立行動への関与と学業への意欲		5. 生き方確立行動への関与と学業への明るい展望
Ⅲ. 受験中心 vs 交友・遊び中心の高校期	Ⅴ. 学業・受験中心の高校期	6. 同 左
Ⅳ. 学業・受験中心の高校期→学業適性重視の進路選択→教官とのかわり意欲		2. 学業適性重視の進路選択と大学学業・教官への積極的構え
		3. 高校期の余裕感と自己肯定

・斜線は，他群の因子に対応した因子が，その群には認められないことを示す。

留年群と卒業者の因子で著しい差異は、卒業群のⅢとサンプリング群のⅤに対応する因子が留年群では見出されないことと、留年群の3に対応する因子が他二群に存在しないという二点である。即ち、第一点は、入学後の交友領域を適応的に展開できるという予想～自信（項目番号33）と教養部講義についていけるという学力面での講義適応の予想～自信（同25）を背景にした全体的適応感ないし全体的適応予想（21，22，38）から成る因子（表10のⅢ及びⅤ；「交友・学業への自信に支えられた適応感－適応予想」の因子）が、留年群においてのみ認められない。第二点は、自己肯定及び全体的適応予想と高校期の遊び・趣味への強い関与、高校生活全体への余裕感と満足感（項目番号14，38，7～9）を中心とする「3. 高校期の余裕感と自己肯定」の因子が、留年群でのみ見出された。但し第二点に関しては、サンプリング群で一見類似した因子であるⅢが存在するから注が必要であろう。サンプリング群のⅢには「余裕感」と「遊び・趣味への関与度」も高く負荷するが、同時に「受験準備への関与度」も正負を逆に高く負荷している反面、「自己肯定」「全体的適応予想」との関連は無視できる。従ってⅢは、卒業群と留年群の双方で抽出された「Ⅴ. 及び6. 学業・受験中心の高校期」に対応するものと見るべきであろう。¹⁰⁾

これに加え全体的適応感（20，21）と「全体的適応予想」（38）という全体的適応に関する3項目が高く負荷する因子の内容にも差異を見出さう。卒業群・サンプリング群ともに、全体的適応感の2項目は、「大学への満足感」の因子（Ⅰ）や「大学・専攻への満足感」の因子（Ⅱ）といった《本意入学感》の因子に高く負荷するのに対して、留年群における全体的適応感の二項目は、《本意入学感》の因子である「4. 大学・専攻への満足感」で低い負荷量しかもち、他二群にあっては全体的適応感と関連の薄い「交友への積極性」因子（Ⅱ，Ⅰ）で高い負荷量をもち、「1. 交友への積極性と全体的適応感」の因子があらわれてくるのである。更に「全体的適応予想」（項目番号38）は、前述のように卒業群のⅢとサンプリング群のⅤにみる「交友と学業の双方に対する自信に支えられた全体的適応予想」に対応した因子が留年群では見出されなかったことのみならず、他二群には存在しない「3. 高校期の余裕感と自己肯定」因子に高く負荷するという特徴がある。自己肯定と全体的適応感が関連するのは他二群でも同様（Ⅲ，Ⅴ）であるが、高校期の余裕感と全体的適応感が関連していることが留年群の特質なのである。

以上の比較から、留年群の因子の特徴として次の4項を提出する。それらは留年予測因としての生活空間構造と見做さうであろう。

1. 大学での交友と大学学業という、学生生活のインフォーマル・フォーマル両側面の中核的活動領域への自信・適応展望と、学生生活全体に対する適応展望との関連が弱いこと。生活空間構造における交友・学業・生活全体という三つの領域もしくは層における適応展望が、統合されないままなげ出されているのである。
2. 高校期・受験期における個人的趣味や遊びに対する関与感－不関与感が、高・受験期全体を回顧したときの余裕感－切迫感・満足感－不満感に結びつき、さらに、現在の自分に対する自己肯定－自己嫌悪に結びつき、今後の学生生活全体の適応－非適応展望に結びついていること。即ち、留年群の自己肯定や全体的適応展望が、高校生活の中核的活動領域である筈の、学業・受験や交友・クラブ活動とは無関連に、遊び・趣味への関与感から生じてくることが特徴といえる。前節の第4項で提出した仮説（自己肯定による緊張欠如から留年へ）を傍証する知見である。

3. 本意—不本意感と全体的な適応感や適応展望とが結びつかないことは、留年群が本意—不本意感を周到に分離した生活空間構造を形成していることを示唆する。¹¹⁾
4. 留年群でのみく交友への積極性>の因子が全体的適応感と関連していることは、留年群の生活空間構造において、交友領域に積極的になれるか否かが適応感を規定することを示す。友人体験は青年期前半の基本的発達課題であり、青年期後期たる大学生期にあつては、友人体験を前提とした次の発達課題へのとりくみが本来のテーマであり本来の適応展望の課題である筈なのに、留年群は依然として、交友領域へのかかわりが適応感を形成する焦点になっているのである。交友領域へのかかわりを「重く」捉えている層ほど全体的適応感も不良となり、留年に至りやすいと言えよう。

Ⅳ 教養部終了時点の生活体制と卒業留年

Ⅳ—1 卒業留年の関連変数からみた生活体制

表11に平均値比較と逐次重回帰分析とによって卒業—留年の関連項目として拾いだされた項目のみについて分析結果を示した。ネガティブな反応ほど留年に陥りやすい関連性をもつ項目が多いが、「13. 後期テストへの自信」「16. クラス・寮活動」「29. 自己肯定」「31. 一年間の関与度：学業」「32. 同：サークル」「34. 同：生き方確立」「43. 学部講義への学力面での自信」「59. 卒後進路明確度」の8項目では双方あるいは一方のみで、それらへのポジティブな反応ほど留年が促される逆機能的関連性が認められる。うち「卒後進路明確度」は平均値比較では順機能、重回帰分析では逆機能的関連性を示す抑制変数である。

判別分析の結果は表12の通りである。判別係数の絶対値が上位10位までの項目で、上の二つの分析で関連変数として見出された項目は項目番号10, 12, 13, 40, 43, 44, 59の7項目であり、予測性の方向はすべて上の二つの分析におけるそれと一致している。新たに関連変数として拾われたのは、「17, 18」の友人交流への回顧の2項目、「39. 総括的適応感」の計3項目であるが、友人交流の2項目は判別係数の正負が逆になっており、しかも、上の二つの分析では拾い出されなかった、という特徴をもつ。「総括的適応感」と、重回帰分析で関連性が認められた「40. 現在の適応感」とは、判別係数の値が他項目に比べ突出し、しかも、正負が逆、平均値比較では差がないといった特徴をもつ。さて、「17」「18」と「39」「40」の二つのセット項目は、交友領域との関わりと全体的適応感とを夫々二つの角度から捉えるために分化させた項目であり、高い相関がえられることを見越し導入した類似項目であった。この二つのセット項目の双方で、他の分析では認められなかった関連性が、しかも、セット項目の内部で判別係数の正負を逆にする予測性が見出されたのは予想外の結果である。そこで以下の考察の資料にするために、二つのセット項目の相関係数を調べた(表13)。表13からの知見は次の第7・8項で検討される。

以上の三つの分析と表13の相関係数とに基き、卒業遅延を教養部終了直前時点で予測させる要因として次の諸項が括りだされる。

1. 対家族の回顧・展望の4項目(23・24, 55・56)より、不良な家族との関係。多変量解析では「23.(回顧としての)適応感」のみが、しかも逐次重回帰分析のみで、関連変数として拾い上げ

られるだけだが、平均値比較で家族関係の全項目が有意であることが重要であろう。先述の通り多変量解析はアーチ・ファクトに過ぎぬ可能性があるからである。

2. 教養部講義へのかかわりに関する4項目(7・9, 10・12)と次年度の学部講義への「43. 学力面の自信」「44. 出席意欲」より、教養部・学部双方の学業に対する関与意欲の弱さ。特に、「10. 語学予復習」における留年群の平均値4.16とは、<どちらかというと予復習しなかった>が4.00であるからそれにすら達しない自己評価を下していることを意味し、しかも弘前大学4年制学部の語学とは前述の如く1科目1年間4単位のみが課せられるに過ぎぬ制度的事実とあわせると、1年間4単位の語学の予復習すらやらなかった(もちろん、それでもストレートに学部に進学した者が留年群なのである)ことにあらわれている、大学学業に関して大学が期待している水準をはるかに下回る関与しかこれまでせず、学部期学業への関与意欲も弱い者ほど卒業遅延に至りやすい事が示された。更に「44. 学部講義への自信」において留年群がポジティブな反応を示すこ

表11. 教養部終了時調査による平均値比較と逐重回帰分析

No	項 目	平 均 値 比 較							逐次重回帰分析		
		卒 業 群			留 年 群			t (差の 方向)	[n=468, R=.333**]	std. B	t
		n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD				
7.	対 講 義 : 魅 力 度	524	3.24	.87	49	3.47	.92	○ (－)			
9.	〃 : 出 席 度	522	2.68	.95	49	3.08	1.04	** (－)			
10.	〃 : 外国語予復習	523	3.66	1.22	49	4.16	.94	** (－)	－ .159	**	
12.	前 期 テ ス ト 成 功 感	524	3.11	1.16	49	3.59	.98	** (－)	－ .117	*	
13.	後 期 テ ス ト へ の 自 信	523	3.78	.97	49	3.41	.96	* (＋)	＋ .145	**	
16.	ク ラ ス ・ 寮 活 動	523	3.32	1.29	49	3.02	1.38		＋ .123	**	
23.	対 家 族 : 適 応 感	522	1.89	.82	49	2.04	1.06	* (－)	－ .098	*	
24.	〃 : 交 流 度	521	2.27	.95	49	2.67	1.16	** (－)			
29.	自 己 肯 定	517	3.21	1.05	49	2.90	1.01	* (＋)			
31.	一年間の関与度：学 業	524	3.33	.98	49	3.37	.93		＋ .101	○	
32.	〃 : サークル	524	2.70	1.35	49	2.39	1.08	○ (＋)			
34.	〃 : 生き方確立	524	2.81	.99	49	2.57	.91	○ (＋)	＋ .105	*	
40.	現在の全体的適応感	509	2.41	.84	47	2.60	.92		－ .105	*	
43.	学部講義への展望：学力面の自信	513	2.73	.84	48	2.50	.95	○ (＋)			
44.	〃 : 出席意欲	515	1.72	.76	48	2.02	.96	** (－)	－ .092	*	
55.	対 家 族 : 交 流 意 欲	513	2.14	.86	48	2.44	1.01	* (－)			
56.	〃 : 適応予想	513	1.99	.79	48	2.29	1.01	* (－)			
59.	卒 後 進 路 明 確 度	523	2.50	1.24	48	2.94	1.42	* (－)	＋ .086	○	

注・No; 表4-2の項目番号に対応。

・ \bar{x} ; 高得点ほど消極的・非適応的反応になる。

・「差の方向」, 及び「std. B」の正負; プラスはその項目への積極的・適応的反応ほど留年を予測させ、マイナスはその項目への消極的・非適応反応ほど留年を予測させることを示す。

・○ $P \leq 0.10$, * $P \leq 0.05$, ** $P \leq 0.01$, *** $P \leq 0.001$ 。

とから、学業への関与意欲が弱いにもかかわらず、学部学業への適応に楽観的展望をもっていることも留年の予測因になる。他方「31. 一年間の関与度：学業」は逐次重回帰分析でのみ、ポジティブな反応ほど留年が促される10%レベルの逆機能的関連が検出された。但しこの項目の「関与度」とは、『力を入れた程度』という表現で問われている。学業からのモラトリアム期たる一年次に学業に力を入れる事は学生文化からみた非適応でもある。

表12. 教養部終了時調査による判別分析結果

No	項 目			判別係数 ×100	順位	No	項 目			判別係数 ×100	順位
1	所属満足感	大 学 へ 満足感	大 学	+ .86		33	関 与 度 の 総 括	交 友	+ .14		
2			学 部	+ .53		34		生き方確立	+1.01		
3			学 科	- .24		35		遊び・趣味	- .01		
4			転部科意思	- .43		36		アルバイト	+ .03		
5				再受験意思	+ .27		37	適 応 感	支え集団の発見感	+ .18	
6	地 域 へ の 満 足 感			+ .18		38	生きがい～充実感		+ .24		
⑦	フォー ーマル 領域 への 回顧	対講義	魅 力 度	- .83		39	総 括 的 適 応 感		+2.12	2	
8			適 応 度	- .70		40	現在の全体的適応感		-2.89	1	
⑨			出 席 度	- .59		41	学 業 へ の 意 欲	+ .56			
⑩			語学予復習	-1.36	8	42	対講義	魅力度の予想	+ .86		
11	専 攻 準 備 度	+ .52		43	学力面の自信	+1.34		9			
⑫	イン フ ォ ーマ ル 領 域 への 回顧	前期テスト成功感	-1.38	6	44	出 席 意 欲	-1.59	3			
⑬		後期テストの自信	+1.31	10	45	対 教 官 交 流 意 欲	+ .33				
14		対 教 官 交 流 度	- .22		46	ゼミ集団との交流意欲	+ .10				
15		サークル関与度	-1.07		47	研 究 意 欲	- .85				
⑬	イン フ ォ ーマ ル 領 域 への 回顧	クラス・寮活動	+ .41		48	サークル関与意欲	- .03				
17		友 人 交 流	積 極 度	-1.36	7	49	新友人獲得意欲	- .22			
18			幅	+1.43	5	50	対先輩交流意欲	- .08			
19		対先輩交流度	+ .56		51	対後輩交流意欲	- .10				
20	対友人適応感	- .36		52	対友人適応予想	-1.08					
⑮	イン フ ォ ーマ ル 領 域 への 回顧	対家族	適 応 感	- .89		⑮	対家族	交 流 意 欲	+ .09		
⑮			交 流 度	- .82		⑮		適 応 予 想	+ .19		
25	生き方・自己	生き方・人生観	考 える 時 間	- .81		57	全 体 展 望	生き方・自己の確立意欲	- .68		
26			確 立 感	+1.11		58		全 体 的 適 応 予 想	-1.21		
28		自 己 省 察	+ .41		⑮	卒 後 進 路 明 確 度		-1.48	4		
⑮	入学後一年 間における 関 与 度 の 総 括	出 席 行 動 学 業 サークル活動	自 己 肯 定	+ .48		卒業群 (N=428) 判別得点の \bar{x} = +0.0070 判別率 81.3%					
30				+1.17		留年群 (N=43) 判別得点の \bar{x} = -0.0700 判別率 76.7%					
⑮				+ .87							
⑮		+1.18									

- ・Noに○を付した項目は、平均値比較・逐次重回帰分析で有意な項目。
- ・判別係数の正負；-はネガティブな反応ほど、+はポジティブな反応ほど、それぞれ留年を促進する。

要するに、学業への関与意欲が弱い、または、逆に学業の自我中核的定位をすること、及び、学部期の学業に過剰な自信を示すこと、が卒業遅延をもたらすと括ることができよう。

3. テストに関する二項目(12・13)より1年前期試験への失敗感と、1年後期試験への楽観的見通し。前期試験に失敗感があるにも拘らず後期試験に楽観的で不適切な自信をもつといえよう。
4. 「29. 自己肯定」より、自己肯定に伴う緊張の欠如。前述第2項の学部講義への自信や第3項の後期試験への楽観的見通しにも通じ、現在及び将来の自分への過大な自信と括することもできる。
5. 「16. クラス・寮活動」「32. 1年間の関与度：サークル活動」より、1年間のサークル等自治的集団活動への強い関与。自治的集団活動が自我中核化することを通して学業領域が相対的に周辺化し、3年後の留年が準備されると解しうる。
6. 「34. 1年間の関与度：生き方確立」「59. 卒後進路明確度」より、生き方や卒後進路の尚早な確立。豊嶋ら(1989)は、4年次においてすら大学生の自我同一性地位は消極的モラトリウム乃至同一性拡散が主流派であることを明らかにしたが、かかる拡散的学文化からみて1年次から積極的モラトリウムを試みる構え(「34」より)や早期完了的構え(「59」より)をみせることは逸脱的ですらある。また、たとえ尚早に生き方や卒後進路を確立したところで、残る3年間の拡散的文化との相互作用で崩れたり、卒後進路への移行(例えば採用試験)の困難性や進路先のリアリティーが認知される学部期後期になって崩れる危険性も大であろう。かかる逸脱した地位や崩壊の危険性が留年を促進していくものと解される。¹³⁾
7. 1年間の友人交流に関する二項目(17・18)の判別分析結果より、友人獲得に積極的だった(17)ほど留年が回避できるが、友人数が多いと自己評価する(18)ほど留年に至りやすいことが示された。両項目間の相関係数(表13)は卒業群で大だが留年群は.370にすぎず、両群間に5%水準に近い傾向差が認められる($t=1.95$)。即ち卒業群においては両項目間の相関が強いために両項目で正負逆の判別係数は相殺されやすいのに対して、留年群では両項目が相対的に独立しているのである。以上から、浅い拡散した交友領域が留年の予測因になると結ぶことができよう。
8. 全体的適応に関する二項目(39・40)の判別分析結果より、総括的適応感、即ち、入学から現在までを回顧した全体的適応感が良好で、現時点のみに評定スパンを限定したときの適応感が不良なほど留年が生じやすい。しかし表13の通り両項目間の相関は卒業群・留年群ともに著しく高いのに、判別係数の正負が逆であること、「40」と並んで突出した判別係数をえた「39」は平均値比較と重回帰分析では予測性が検知されていないこと、という結果はより詳細な検討を要求するものである。そこで両項目への反応の得点差を調べると、両項目への有効回答者554名中の77.4%(429名)は得点差が0であった。即ちこれらの者においては正負逆の突出した判別係数は相殺される。更に「39」の方が良好な得点を示す者は50名(全体の9.0%)にとどまる。

表13. セット項目(17・18, 39・40)の相関係数

No	項 目	r (n)		
		卒業群	留年群	全 体
17	友 人 交 流	.597 ***	.370 **	.571 ***
18		(511)	(49)	(560)
39	全体的適応	.780 ***	.828 ***	.782 ***
40		(507)	(47)	(554)

・ ** $P \leq 0.01$, *** $P \leq 0.001$ 。

以上から，“総括的適応感と現在の適応感が乖離しており，かつ，前者が良好で後者が不良なものが留年に至りやすい”と結ばねばならない。要するに，入学後1年間の回顧的順調感よりも，教養部終了時における〈今・ここで〉の順調感の良一不良が，卒業一留年を予測させるのである。

以上，8項が列挙されたが，多変量解析の結果によって留年に至りやすい生活体制の全体像を併記しておく。但し，ここでは判別分析による全体像は捨てられる。というのは，他の二つの分析をこえる知見はすでに前述の第7・8項に織りこんであるからである。

a. 逐次重回帰分析による全体像

外国語の予復習をせず前期試験に失敗感をもち，次年度の学部期の講義への出席意欲も不十分であるにもかかわらず，1週間後に迫った後期試験に楽観的展望をもち，更に，入学後1年間の学業への関与度は不良でなかったとの認知をもつ。クラス活動や寮活動といった，サークル以外の自治的活動に関与度が大で，生き方確立への関与度や卒後進路明確度も良好な，尚早な同一性確立ないしは積極的モトリアムへの傾斜がみとめられる。他方，家族との関係は不良である。かかる生活体制をもちつつ，あるいは，もつがゆえに，1年間の生活への回顧的順調感（総括的適応感）とは別に，〈今・ここで〉の全体的適応感は不良である。

Ⅳ－2 群別因子分析からみた生活体制

卒業群（N＝452），卒業群の1/10 サンプル群（N＝45），留年群（N＝45）それぞれの因子構造を表14に示した。分析に際しては留年群のNに比べ項目数が多すぎるので，類似項目がある場合は，昭和52年度から採用された項目を優先すること，理論的に重要度が薄く，かつ前節で予測性がまったく検知されなかった項目を除外すること，という二つの規準が作られ，因子分析に使用されたのは46項目であった。但し37～40の全体的適応に関する項目群は「39. 総括的適応感」1項目のみが残されたが，それはこの項目をトータルな適応の指標と定位してきたこと¹⁴⁾による。

先ず卒業群の因子（Ⅰ～Ⅶ）とサンプル群の因子（Ⅰ～Ⅹ）を比べる。交友関係の諸項目のみに高く負荷し「39. 総括的適応感」でもやや高い負荷量をもつ卒業群のⅠと，サークルへの関与及び先輩との交流を示す卒業群のⅢとが，サンプル群のⅤにほぼ対応する。卒業群のⅡは教養部期の学業や試験へのかかわりの因子であるが，これは，試験へのかかわりの2項目（12，13）こそ高い負荷量をもたぬもののサンプル群のⅢに一部対応している。卒業群のⅣは，サンプル群のⅥと同じく家族関係の因子である。卒業群のⅤは学部期の学業への関与の因子であり，これはサンプル群のⅤにほぼ一致する。卒業群のⅦとサンプル群のⅦは共に所属満足感の因子である。また卒業群のⅦとサンプル群のⅠは，いずれも生き方確立への関与と確立感の因子と解される。以上のように，卒業群の全因子はサンプル群においても対応する因子や，二つを重合した因子をもつのだが，それに対して，サンプル群では卒業群の因子に対応しない新たな因子が3つ見出されている。それは，教養部講義への「9. 出席度」と「12. 前期試験成功感」「29. 自己肯定」「43. 学部講義への自信」「52. 対友人適応予想」「58. 全体的適応予想」が負荷し，“「まじめ」さに基く次年度への楽観性”の因子と解されるⅣ，教養部講義の魅力度の因子であるⅩ₁，.40以上の負荷量をもつ項目が「44. 学部講義出席意欲」のみの因子Ⅹである。うちⅩは卒業群のⅤが

表14. 教養部終了時の因子構造（回転後）

No 項 目			ス ト レ ー ト 卒 業 者																留 年 群										
			1/10 サンプル群										卒 業 群																
			I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	I	II	III	IV	V	VI	VII	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	大学への 満足感	大 学	+47			+			-								+57	-48									-		
2		学 部							-84									+68			+83								
3		学 科								-81									+64			+83							
5		再受験意思								-51									+51	-42				-49	-				
6	地 域 へ の 満 足 感																+		-63										
7	対 講 義	魅 力 度								+57		+																	
8		通 応 度				+53						+47										+51	+			-92			
9		出 席 度			-62					+			+53							-57									
10		語学予復習			-62								+61							-			+54						
11	専 攻 準 備 度				-						+	+											+74						
12	前期テスト成功感					+69							+48						-60										
13	前期テストの自信												+43										+44						
14	対 教 官 交 流 度				-68																		+41						
15	サークル関与度								+80					+77															
16	クラス・寮活動						+												-57					+67					
17	友人交流	傾 傾 度					-71					-69							-66	+			+						
18		巾、					-65						-68						-										
19	対 先 輩 交 流 度										-			+57					-67										
20	対 友 人 適 応 感		+44								+	-69								-76									
23	対 家 族	通 応 感						-71			-					+74						+87							
24		交 流 度						-87									+74						+64						
25	生 き 方	考 える 時 間																	-78				+	+		+83			
26	人 生 観	確 立 度	+63						-41										-62	+						+	-59		
28	自 己 省 察		+58																-54				+						
29	自 己 肯 定		+41				+47			-		-								-43					+51				
30	1 年間の 関 与 度 総 括	出 席 行 動			-71								+57							-59					-				
31		学 業			-67						+			+65							-45			+					
32		サークル活動													+82					-64					+41				
33		交 友					-62						-79							-74									
34		生 き 方 確 立	+69																	-72			+				+63		
35	遊 び		+		+	-42						-													+72				
39	総 括 的 適 応 感		+44			+			-44			-44						+41	-64			+							
41	学 業 へ の 意 欲		+78														+51		-43		+48				+40				
42	対 講 義	魅力度の予想	+	+63			+										+48		-	-	+44					-			
43		学力面の自信		+		+50	+						+						-48		+43				+44				
44		出席意欲		+57								-41						+53			-50					-			
45	対 教 官 交 流 意 欲			+56								+						+66		-73		+							
47	研 究 意 欲																	+69		-59	-	+							
48	サークル関与意欲		+41				-62								+61										+73				
49	新 友 人 獲 得 意 欲				+47		-55										+			-70									
50	対 先 輩 獲 得 意 欲			+	+						-				+41		+46			-81									
52	対 友 人 適 応 予 想						+67						-60							-67				+		-42			
55	対 家 族	交 流 意 欲							-73								+67			-40				+70					
56		適 応 予 想							-85									+80			-			+81					
58	全 体 的 適 応 予 想			+			+49			-		-								-61		+	+		+				
59	卒 後 進 路 明 確 度			+	+																-54	+							
固 有 値			3.64	3.63	3.56	3.35	3.23	3.20	3.04	2.23	1.73	1.44	3.68	2.92	2.56	2.56	2.53	2.46	2.39	8.45	3.50	3.46	3.35	2.78	2.11	2.08	2.03	2.00	1.90
寄 与 率 (%)			12.5	12.5	12.2	11.5	11.1	11.0	10.5	7.7	6.0	5.0	19.3	15.3	13.4	13.4	13.3	12.9	26.7	11.0	10.9	10.6	8.8	6.7	6.6	6.4	6.3	6.0	

・+, -は因子負荷量の絶対値が.30以上,.40未満を示す。

・空白は因子負荷量の絶対値が.30未満。

分離したものと見做すこともできるが、.30～.40の負荷を示す項目の内容からみてここでは新しい因子とみておく。但し次にふれる表15では便宜的に卒業群のⅦに一部対応した位置に配しておいた。

卒業群とサンプリング群の因子構造の比較から、留年群の因子構造の特徴を考察するにあたっては、卒業群との差異のみならず、卒業群のⅠとⅢの重合した因子であるサンプリング群のⅣ、サンプリング群だけで認められたⅦ、Ⅸ、Ⅹとの異同にも注目すべきことが示された。

三群の因子を解釈した上で、対応する因子を同じ行に配し、対応する内容をもつが対応しない内容もある因子は行をずらせるという手法によって表15が作成された。

留年群と卒業者の因子構造間の著しい差異の第一は、卒業者の因子は、客観的な行動領域のちがいに応じた分化をみせているのに対して、留年群では独特なまとまりが形成されていることであり、第二は、卒業者には留年群の因子7に対応する因子がみつめられないことである。第一点は顕著な特徴と見做しうるので詳論すると次の通りである。

卒業者においては、生き方(Ⅰ,Ⅶ),サークル(Ⅷ・Ⅴ,Ⅲ),交友(Ⅰ),家族(Ⅵ,Ⅳ),教養部講義(Ⅸ,Ⅲ,Ⅱ),学部学業(Ⅱ・Ⅹ,Ⅴ)というように、学生の行動領域・生活空間領域として一般に分化しやすいと思われる各領域へのかかわりがそれぞれ独立した因子(サンプリング群においてはより細分された因子)としてあらわれるのに、留年群では「1. 縦・横の対人関係,学部学業への積極性」「5. 教養部・学部を通した学業全体への積極的構え」「2. 教養部・学部を通して出席重視と地域満足感」「10. 広い交友と生き方確立」というように、一般的な分化しやすさとは異なる分

表15. 教養部終了時因子の比較

ス ト レ ー ト 卒 業 者		留 年 群
1/10 サンプリング群	卒 業 群	
		10. 広い交友と生き方確立
Ⅰ. 生き方・自己の模索と確立	Ⅶ. 生き方の模索と確立	8. 生き方の模索
Ⅷ. 過去のサークルへの積極性	Ⅲ. 過去および将来のサークルへの積極性と対先輩の交流	6. 過去および将来のサークルへの積極性
Ⅴ. 将来のサークル,交友への積極性	Ⅰ. 交友への積極性に支えられた全体的適応感	1. 縦・横(教官・先輩・交友)の対人関係,学部学業への積極性に支えられた全体的適応感
	Ⅵ. 専攻・大学への満足感に支えられた全体的適応感	3. 専攻への満足感・意欲
Ⅶ. 専攻への満足感に支えられた全体的適応感	Ⅳ. 家族との関係	4. 同 左
Ⅵ. 同 右	Ⅱ. 教養部学業への積極的構え	9. 教養部講義への関心
Ⅸ. 教養部講義への関心	Ⅴ. 学部学業への積極的構え	5. 教養部・学部を通した学業全体への積極的構え
Ⅲ. 教養部学業への積極的構え		2. 教養部・学部を通して出席重視と地域満足感
Ⅱ. 学部学業への積極的構え		7. 自己肯定に支えられた遊び志向
Ⅹ. 学部学業への出席意欲		
Ⅳ. まじめさに基く次年度への楽観性		

・斜線は、他群の因子に対応した因子が、その群には認められないことを示す。

化がみとめられる。即ち因子1は、卒業群ではサークルと結びついている対先輩交流(Ⅲ)が、交友と結びつき、しかも、かかる先輩・交友とのかかわりが更に対教官交流と結びつく、というように、対人関係全般が生活空間構造においてひとつの領域として形成されている事をうかがわせる。しかもこの領域に、学部学業への構えも結びつき、この領域は対人交流と学部学業という客観的に異質な行動空間が混在した領域となっているのである。そして、この混在領域に対する積極的構えが、良好な全体的適応感に結びつき、消極的構えが不良な全体的適応感に結びついている。ちなみに卒業生においては全体的適応感は、交友領域と専攻満足の領域に結びついている。因子5及び因子2は、客観的に異質であり、かつ卒業生も分化して捉えている教養部学業と学部学業の二領域(卒業群では、ⅡとⅤに分化、サンプリング群では、Ⅸ・Ⅲ・Ⅱ・Ⅹに細分化している)が、留年群においては融合した未分化な“学業一般”の領域として成立している事を示唆する。更に、因子2は出席行動と地域満足感という異質な二者が融合した因子でもある。因子10は生き方の確立と交友の広さとが結びついていることを示すが、卒業生においては生き方(Ⅰ,Ⅶ)と交友(Ⅴ,Ⅰ)は独立していて、これも留年群の未分化性を示唆している。以上、留年群の生活体制の未分化性、もしくは、生活空間構造の領域分化における客観性の乏しさを特徴として抽出することができる。

第二の差異は、卒業生においては「35. 1年間の関与度総括：遊び」が交友領域に負荷しいわば<交遊>の因子を構成している(Ⅰ,Ⅴ)のに対して、留年群では独立した因子「7. 自己肯定に支えられた遊び志向」が見出された点であった。ちなみに「29. 自己肯定」は卒業群では.40以上の負荷量をもつ因子が見出されないが、サンプリング群では生き方の因子(Ⅰ)と「まじめさに基く楽観性」の因子(Ⅳ)で.40以上の負荷量をもつ。それに対して留年群の「29. 遊び」は、交友を含んだ混在領域の存在を示す因子1と、この因子7とで.40以上の負荷量をもっている。即ち、卒業生にあっては学業への<まじめさ>や生き方確立による自己肯定か、又は、自己肯定ゆえの生き方確立である可能性があるのに、留年群の自己肯定とは<交遊>や<遊びそれ自体>を支えるか、又は、<交遊><遊び自体>によって支えられるものに過ぎぬ可能性が強い。

上述の2点に加え、卒業生の二群では共に生き方の模索と確立とが結びついている(Ⅶ,Ⅰ)のに対して、留年群においては模索(8)と確立(10)の因子が独立していることや、卒業生の二群では専攻への満足感が全体的適応感を支えていると解される(Ⅵ,Ⅶ)のに対して、留年群では、専攻への満足感と全体的適応感の関連が弱い(3)こと、という2点も、留年群の特徴といえよう。

以上の比較から留年群の因子構造、換言すればマスとしての生活空間構造・生活体制の特徴として、次の6項を提出する。

1. 一般的・客観的な領域分化とは異質の、未分化な混在領域が多いこと。これは入学直後の因子の特徴として指摘した第1項に通ずるものである。とりわけ、主因子法による因子分析の第1因子として混在領域の成立を如実に示す因子が抽出されたことは、留年群の未分化性を傍証するものである。
2. 因子2より、留年群において弘前という遠隔地に来てしまった地域不本意感や、弘前に残ってしまった不本意感が出席行動を阻害する機制の存在が示唆される。Ⅱ章で指摘した遠隔地出身者の留年傾向は、一部この機制によって説明できるであろう。
3. 因子10より、留年群の生き方・人生指針の内容は、広い、換言すれば拡散的な交友領域によっ

て支えられるだけのものにすぎぬ可能性がある。卒業者の二群では、生き方・人生指針は交友領域や他領域とは別に、生き方・人生指針の本来の役割たる生活空間構造の統合軸・生活体制の統制原理として他領域から独立した位置を確保しているか、又は、そうなりうる可能性をもっているのに対して、留年群においては交友領域の、しかも、交友の深さではなく広さ（拡散度）に結びついているにとどまることが重要であろう。要するに留年群の生き方・人生指針とは、生きる原理としてではなく交友の広狭に指向した“交友の仕方”を内容とする可能性があり、このことを留年群の第1因子に対人関係全般の因子が見出された事実と併わせると、留年群における交友の「重さ」を括り出すことができる。かかる「重さ」は前章においても留年群の予測因として指摘できたものである。

4. “自己肯定から遊びへ”というモメントの存在。遊びが独立した領域として生活空間構造に析出される傾向がある。更に、遊びと自己肯定の結合は、前章の因子比較からも導かれたものであるから、留年群の通時的特徴と見做しうる。
5. 生き方・人生指針の模索が確立に結びつかないこと。卒業者では、模索と確立が1つの因子を構成し、模索から確立・同一性達成へ、模索の欠如から非確立・拡散へ、という一般的過程が進行しやすいと解されるのに対して、留年群では、模索の渦中としての積極的モラトリウムや、模索なしの確立としての早期完了の状態で学部期に移行していきやすいのであろう。
6. 所属する学部・学科（専攻）への満足感と全体的適応感の関連が弱いこと。全体的適応感第1因子（対人関係及び学部学業の因子）と関連するだけで、卒業者二群で認められた専攻満足感の因子との関連が弱い。留年群では、所属専攻の領域が全体的適応感とは分離されていることを示唆する。

Ⅶ 総合的考察

本章においてはⅠ～Ⅳ章でえられた知見・仮説群の整理と、我々の前報（1988b）も含め留年要因に関する先行研究の知見との対照とが行なわれる。本稿で提出された留年予測因を、関連する行動領域・生活空間領域の異同という枠組によって表16に整理した。表中の項番号（○内）は本章で試みられる総合的考察のための番号であり、各項の記載のあとに付した〔－〕は、その項の詳細が述べられている〔節〕と〔節内の項番号〕を意味している。即ち表中第①項の「〔1-5〕」は、その記述が1節の5項においてなされたことを示す。但し、項をたてていない第Ⅱ章で指摘した事項は〔－〕を付していない。以下、領域ごとに総合的考察がなされる。

学業領域への関わりについては、入学直後・教養部終了時ともに、教養部学業への弱い関与（①、⑱、⑲、㉑）と、それにもかかわらず、将来の専攻研究への尚早なとりくみの構え（②）や学部学業への過剰な自信（㉒）にみるような、将来への期待・自信、という矛盾した構えが留年群を特徴づけている。学業に関しては当面の課題への関心や関与をひきあげ、将来に期待をなげかけるという機制が留年の予測因となると結ぶことができよう。この特徴は前期試験に失敗したと感じつつも後期試験に楽観的・不当な自信をもつ（㉒）ことに如実にあらわれている。このような当面の学業課題に対するかかわりの不良さは、このコホートの教養部取得単位数からみた非適応の「予測因」（表1の

表16. 卒業遅延の予測因：総括表

領 域	入学直後の生活体制 —Ⅲ章の要約—	教養部終了時の生活体制 —Ⅳ章の要約—
学 業	①教養部講義への弱い期待 [1-5] ②専門研究への尚早なとりくみの構え [1-6]	⑰教養部・学部双方の学業への弱い関与意欲。とくに語学予復習の乏しさ。 [1-1] ⑱教養部学業の自我中核的定位 [1-1] ⑲前期試験失敗感にもかかわらず後期試験に楽観的 [1-3] ⑳学部学業への楽観性～過剰な自信 [1-2] ㉑地域不本意感による出席不良 [2-2]
交 友	③高校期から一貫した交友意欲の乏しさ [1-3] ④先輩への依存 [1-3] ⑤交友への積極性－消極性と全体的適応感－非適応感のむすびつき [2-4] ⑥交友領域の「重さ」 [2-4]	㉒浅い・拡散した交友 [1-7] ㉓交友領域の重さ [2-3]
対人関係全般	⑦対人関係(含、家族)全般の自我周辺性 [1-b]	㉔交友・対先輩・对教官の混在領域が形成 [2-1]
自治的集団活動		㉕サークル、クラス・寮活動への強い関与 [1-5]
家族関係	⑧不良な関係、特に関係忌避 [1-1]	㉖不良な関係 [1-1]
遊 び (趣 味)	⑨「遊び」と全体的適応展望の結びつき [2-2] ⑩「遊び」と自己肯定の結びつき [2-2]	㉗「遊び」の生活空間領域の形成 [2-4] ㉘「遊び」と自己肯定の結びつき [2-4]
生 き 方 ・ 自 己 ・ 自我同一性	⑪生き方の模索ないままの自己肯定～緊張の欠如 [1-4] [2-2] ⑫生き方・卒後進路展望とは無関係の自己省察 [1-4] ⑬生き方・卒後進路の模索の乏しさと未確立 [1-2]	㉙緊張の欠如。自分への過大な自信 [1-4] ⑩交友の広狭に指向した「生き方」 [2-3] ⑪生き方・卒後進路展望の尚早な確立 [1-6] ⑫生き方の模索 [1-a] ⑬積極的モラトリアムの渦中か、又は、早期完了 [2-5]
全体的適応 ・ 全体的体制	⑭今後の適応展望の作りにくさ [1-b] ⑮(不)本意感と全体的適応感の分離 [2-3] ⑯交友・学業・生活全体への適応展望の未統合 [2-1]	㉚回顧的適応感と現在の全体的適応感が乖離、かつ、後者がより不良 [1-8] ㉛所属専攻(不)本意感と全体的適応感の分離 [2-6] ㉜交友・対先輩・对教官を包括する対人関係全般と学業とが混在・未分化な生活空間領域が形成され中核化 [2-1]
外的属性 ならびに 1年次単位数－Ⅱ章の要約—	㉟人文・農学部であること。教育学部でないこと。 ㊱職業志向の弱さ、教養志向・積極的モラトリアム志向。 ㊲男子 ㊳遠隔県出身 ㊴寮居住 ㊵単位数の少なさ。とくに一般教育科目と「非必修外国語(他大学の第二外国語に相当)」。 ㊶「保体科目+特設科目」単位数が多いこと。	

・〔n-m〕は、当該項が第n節第m項で指摘されていることを示す。

「学業」行)や「予測変数」(表2の「学業」行の下行)での知見と一致する。さらに、教養部講義に対する適応感が単位数を上昇させるのに、専攻準備度や次年度(即ち、学部期)講義適応予想が単位数を抑制するという「予測変数」での知見は、“教養部学業への不良な関与にもかかわらず将来の学業への期待”を示す留年群の特徴と一致している。要するに、かかる機制が、教養部期の大学非適応をもたらすし、もしそれが回避できたとしても卒業遅延を準備していくと解される。従来、学業への不良な関わりを留年の要因とした研究は多い(上地 1982, 榎本 1978, 岩村 1977)が、学業への不良な関わり一般よりも、当面する学業課題への不良な関わりの方が重要なのである。その意味で高橋(1989)、菅野(1981)、Astin(1976)らの指摘は至当であった。高橋の言う「的確な外部規範の考慮と適度の強迫性」が、当面する学業課題に向ける体制を教養部期に形成させることを通して、卒業遅延は回避されやすくなるのである。

他方、教養部学業の自我中核的定位(⑬)や教養志向(⑦)は、教養部学生にとって一見、当面する学業課題の如く認知されるかもしれないが、しかし、教養部学業が学部への通過儀礼化している大学一学生文化の中では、それらは「外部規範」の認知失敗を意味するのである。かくて、やはり卒業遅延が促されることになる。

なお、1年次取得単位数が留年群で少ないこと(⑭)、「保体+特設科目」単位数が多いこと(⑤)も、“学業に関する的確な外部規範認知と強迫性”の乏しさによって説明できよう。

次に、交友領域については、やはり一貫して、「重さ」が指摘された。入学直後の特徴であった交友意欲の乏しさは教養部終了時になると解消するが、代わって交友の浅さ・拡散性が留年群の特徴になり、いずれも、交友関係の障害と括ることができる。こうした障害された交友領域が、一貫して留年群の第1因子として抽出され、全体的適応感と結びついたり(⑤)、生き方・人生指針が交友に関連している(⑩)ことに示される通り、留年群にとって重要な領域となっているのである。

なお入学時における交友意欲の乏しさは、藤井ら(1975)の見出した入学時の孤立一内閉傾向、鳴澤ら(1979)の見出した「孤立型留年」に一致し、更に、我々の教養部単位数と生活体制の関連性の研究(表1・2)とも一致する。しかも、教養部終了時における浅い拡散的な交友という留年群の特徴は、表2の「友人数(一)」、即ち、友人数が多いほど単位数が低下する抑制的関連と一致している。

第四に対人関係全般に関しては、交友、対先輩・対教官の関係といった縦・横の対人関係全般が混在する領域が形成されるに至ること(⑭)、そして、それが教養部終了時には第1因子を構成するに至ることが重要であろう。加えて、⑥⑭でみたように交友は「重い」領域であった。留年群の対人関係は混在した重い<カオス>の領域であるかに見える。かかる留年群の特徴は、教養部取得単位数の予測因としてはまだ浮上してこない。表1でわずかに、「1年次終了時までの縦の人間関係のとりにくさ」が低単位数の予測因だったにすぎない。即ち表1でいう「とりにくさ」の背後に重い<カオス>としての対人関係領域をもっている層が、卒業遅延に至るのであろう。ここでは梶中(1981)のいう「教養課程ではまだ顕在化しなかった問題の顕在化」による卒業留年という仮説が妥当するようである。

第五に、自治的集団活動の領域では、入学直後の関わり意欲や高校期の関与度こそ差がないが、留年群は教養部終了時までには、サークルや寮・クラス活動への強い関与をみせるようになる(⑮)。

これはサークル関与意欲や関与度総括が教養部単位数を低下させるという表2の結果と同一であり、また岩村(1977)の<他活動(サークル・アルバイト等)への集中>という学業非適応要因に一致するが、教養部終了時に強い関与をみせることは学部期での強い関与を予想させるものであるから、留年要因になるのも当然ではあろう。

第六に、家族関係の領域においては、一貫して不良な関係が卒業遅延の予測因である。これもやはり、不良な教養部取得単位数の予測因であった(表1・2)。かかる知見は、5回生以上の在生学生において家族関係が不良な事実を“留年の結果としての家族との葛藤”で説明した上地ら(1982)に対する反証となる。即ち、家族との葛藤が先行してそれが卒業遅延を促すのである。もっとも、留年の決定によって一層葛藤が増幅されるという回路もあろうが、葛藤が先行する点が重要と思われる。なお遠隔地出身であること(㊤)も留年予測因であり、これは舩中(1971)、菅野(1981)らの結果と近似だが、遠隔地大学への入学の背景に、葛藤する家族との距離をとり、生活空間構造において周辺化しようとする動機が存在すると見られる。¹⁵⁾

第七に、留年群においては「遊び」が独立した領域として生活空間構造に析出され、しかも、遊びへの関与と自己肯定が結びついている。これは鳴沢ら(1979)の見出した「大学生活謳歌型積極留年」と一部重なるであろう。また、教養部単位と生活体制の関連においても、遊びと教養部期の大学非適応の結びつきが見出されていた(表1「入学直後まで」列・「他」行、表2「入学直後」列及び「1年次終了時点」列・「他」行)。

第八に、生き方・自己・自我同一性では、まず、自己肯定や緊張の欠如(㊨, ㊩)が入学直後・教養部終了時ともに留年予測因となることが示された。これは高橋(1979)の見出した留年既定4回生における高い自己受容と符合する結果であるが、自己肯定又は自己受容が留年の結果ではなく要因であることを示唆する点、先述の、家族葛藤と同様、新知見として位置付けることができよう。また、自己肯定は教養部単位数にも抑制的関連をもっていた(表2)。次に、生き方・自我同一性に関して興味深い事実が表16から読みとれる。即ち留年群は入学直後においては、模索の乏しさと未確立(㊪)を示していたのに、逆に教養部終了時には、尚早な確立(㊫)あるいは模索(㊬)を示すことである。これを換言すると、入学直後には同一性拡散に傾いていた留年群が、教養部終了時には、早期完了か又は積極的モラトリウムへの傾斜(㊭, ㊮)に両極化しやすいのである。このような同一性変遷過程を教養部期に辿る者が卒業遅延に至りやすいと言えよう。このことは、教養部単位数との関連をみた表1・表2からは窺いえず、舩中の「顕在化」機制仮説を支持する。

最後に、全体的適応と全体的体制に関しては、<分離>と<未統合>が卒業遅延を予測させるとまとめることができる。即ち、入学直後における、本意—不本意感と全体的適応—非適応感の分離、教養部終了時における、所属専攻本意—不本意感と全体的適応—非適応感の分離や回顧的適応感と全体的適応感の分(乖)離(㊯, ㊱, ㊲)であり、入学直後と教養部終了時の双方における生活空間構造や未来の適応展望の未分化性(㊳, ㊴)である。かかる二つの特徴は、先行研究も、表1・表2の総括を提出した我々の前報(豊嶋 1988b)も指摘しなかった点である。なお、今後の適応展望の作りにくさ(㊵), 全体的適応感の不良さ(㊶)は一部、前報で指摘されている。

以上、本章では卒業留年予測因としての教養部期の生活体制を整理してきたが、あわせて、舩中の<顕在化>機制仮説が少なくとも幾つかの要因について支持されること、我々が前報で提出した、

“教養部単位数を測度とする大学非適応”の予測因としての教養部期生活体制(表1・表2)が卒業留年予測因に一致するか、あるいはそれらのより深いレベルでの布置が卒業留年を促進すること、を示した。しかし<顕在化>機制仮説や<深いレベルでの布置による促進>仮説を検証するには、学部期の生活体制と卒業留年の関連が分析されねばならない。本稿の対象コホートに対しては、2・3・4年次の追跡調査が施行されている。それらの資料を今回と同一の方法で比較することを通して、新知見の獲得と仮説検証をはかることが我々の次の課題となる。¹⁶⁾

註

- 1) 本号掲載論文(豊嶋 1989b)のⅣ章で述べた通り、大学組織はストレート卒業を前提にした学生受け入れ体制しか作っていないことから明らかである。
- 2) 同論文のⅣ章でふれた如く、最新の「学校基本調査(高等教育)」では、卒業生に占める所定年限での卒業生の比率が昭和52年以降最大の78.9%に達した事実(文部省大臣官房調査統計企画課 1989)がこのことを示唆している。
- 3) 例えば『自然』誌における阪大・石谷(1968)論文にはじまる一般誌での留年論議も、事例化の契機であった。
- 4) 本研究の対象コホートでは教養部留年者は15%にとどまる。
- 5) 3年次までの5回の調査は「大学生における適応の構造と適応過程の予測因に関する追跡的研究」プロジェクト(科研費一般研究C)として展開された。
- 6) この他、自我同一性地位を測定する6点尺度項目群も組み込んであるが、今回の分析からは除外した。なお自我同一性地位に関する検討は一部既報告である(芳野ら 1989, 豊嶋ら 1989a)。
- 7) 卒業に1点、留年に2点を割当てたのは、5段階評定項目への反応に対してnegativeなほど高得点を与えて処理したことと対応している。
- 8) カテゴリー変数に過ぎない留年一卒業を目的変数とした重回帰分析は当然ながら便宜的なものである。但し同様の便法は、ドロップ・アウトと在籍(attrition)を目的変数にした重回帰分析によってドロップ・アウトを論じたAstin, A. (1976)も使用している。
- 9) 因子分析によれば卒業群・留年群ともに両項目は異なる因子に属することが明らかになる(表9参照)。
- 10) 留年群の因子「3」を特徴づけるもうひとつの項目である「高校期への満足感」はサンプリング群では因子Ⅰに高く負荷するが、因子Ⅰは“大学への満足感と全体的適応感”の因子であって、入学直後の大学本意感と全体的適応感が高校期への回顧的満足感をおしあげる機制がサンプリング群に働いていることを示すものであろう。因子「3」と因子Ⅰの対応は当然ながら弱い。
- 11) 卒業年次になって不本意入学を訴えて来談する事例や、積極的モラトリアム(例えば海外「冒険」旅行、専攻と無関連の海外留学など)による卒業留年者の事例に、かかる<不本意感の分離>の遅延された解除がテーマとなる事例をしばしば見出すことができる。
- 12) 教養部終了時調査の翌週から後期試験が行なわれた。
- 13) 両項目の平均値比較結果のみに注目すると“不明確な卒後進路展望のゆえの生き方確立への傾注”を留年予測因として括することも可能である(豊嶋 1989a)が、重回帰分析では両項目とも抑制変数になっていること、及び、後出の因子分析において「生き方」の因子に対する「59」の負荷量が小さく従って「生き方」と「卒後進路展望」の直接の関連が弱いと考えてよいこと、という二つの理由から“ ”内の仮説は棄却できる。もっともその仮説が採用されたとしても生き方の尚早な確立への意欲が留年を予測させるという本項の小括に変更を加える必要はない。

- 14) 豊嶋ほか(1980. 3～5頁)に理論的根拠を展開した。
- 15) 豊嶋(1987)の「来談事例2」(11～12頁)は出身地での人間関係の葛藤から逃れる意図であえて「避達」の弘前を選択した事例である。
- 16) 卒業年次の生活体制による卒業留年の予測は第1報が発表済みである(豊嶋ほか 1989b)。

文 献

- 1) Astin, A. W. 1976, "Preventing Students From Dropping Out", Jossey-Bass.
- 2) 榎本 稔 1978, 留年について(1)一その事例研究一, 山梨大学保健管理センター紀要 2, 7-19.
- 3) 藤井 虔・古賀一男 1975, 卒業留年に関する研究(I), 京都大学学生懇話室紀要 5, 55-75.
- 4) 同上 1977, 卒業留年に関する研究(II), 京都大学学生懇話室紀要 7, 58-65.
- 5) 石谷清幹 1966, 大学における大量留年問題の現状一大阪大学の場合一, 自然 21(10), 92-103.
- 6) 石郷岡泰 1962, 大学生の生活空間の構造と機能に対する社会心理学的接近一とくに女子大学生の調査を中心にして一, 心理学評論 6, 105-115.
- 7) 同上 1982, 挫折の「診断」, 原谷・安藤編「青春からの出発一人間解放への青年心理学」, アカデミア出版会, 235-256.
- 8) 岩村 聡 1977, 学生の不適応について一主として修学・進路相談の観点から一, 広島大学総合科学部学生相談室活動報告書 2, 26-45.
- 9) 同上 1979, 学生の勉学・進路・留年・休退学一 1. 学生の勉学・進路問題, 藤土編「現代学生の精神衛生」北大路書房, 55-67.
- 10) 文部省高等教育局大学課 1984, 昭和59年度国公(私)立大学入学志願状況調べ, 大学資料 92, 92-105.
- 11) 同上(監) 1984, 「昭和59年度全国大学一覧」, 文教協会.
- 12) 文部省大臣官房調査統計企画課 1984, 昭和59年度大学・短期大学・高等専門学校の学校調査について一昭和59年度学校基本調査(高等教育)から一, 大学と学生 222, 58-61.
- 13) 同上 1989, 昭和63年度学校基本調査速報(高等教育)の概要一卒業後の状況調査一, 大学と学生 279, 55-61.
- 14) 鳴澤 實・横溝亮一 1979, 卒業留年生の実態調査, 学生相談室レポート(東京都立大学) 7, 5-48.
- 15) 梶中 達 1971, 教養課程留年と卒業遅延, 京都大学学生懇話室紀要 1, 42-53.
- 16) 同上 1981, 留年, 笠原・山田編「キャンパスの症状群」弘文堂, 90-108.
- 17) 菅野泰蔵 1981, 留年問題を探る(II), 学生相談室報告(学習院大学) 5, 3-34.
- 18) 高橋裕行 1979, UPIにもとづく長期, 短期留年者と非留年者の比較, 第21回日本教育心理学会発表論文集, 556-557.
- 19) 同上 1982, 中・小規模大学にみられる留年現象について, ADONIS-HEALTH(福井大学保健管理センター年報) 5, 56-65.
- 20) 同上 1989, パーソナリティ特性の就学の予測に及ぼす効果一自己実現尺度を説明変数とする林式数量化II類適用の試み一, ADONIS-HEALTH 12, 45-53.
- 21) 豊嶋秋彦 1987, 不本意入学感・準拠集団・人格適応の三者関連に対する社会心理学的接近, 弘前大学保健管理概要 10, 1-21.
- 22) 同上 1988a, 1年次の生活体制による卒業留年予測の試み, 第26回全国大学保健管理研究集会東北地方研究集会報告書, 15-17.
- 23) 同上 1988b, 大学生の生活空間構造と大学文化への社会・文化適応一生活体制は教養課程取得単位数をどう予測するか, 弘前大学保健管理概要 11, 1-28.

- 24) 豊嶋秋彦 1989 a, 卒業留年と教養部期の生活体制, 第10回大学精神衛生研究会報告書, 167-170.
- 25) 同上 1989 b, 学生理解の社会心理学的枠組と接近法 — 適応概念と留年研究を中心に, 弘前大学保健管理概要 12 (本誌), 1-21.
- 26) 豊嶋秋彦・清 俊夫・芳野晴男 1980, 大学新入生における適応状況と適応過程(Ⅲ)—入試制度改訂に伴う適応の変容と同化の諸相, 弘前大学保健管理概要 5, 1-41.
- 27) 豊嶋秋彦・芳野晴男・清 俊夫・細川 徹 1987, 大学生における適応の構造と適応過程の予測因に関する追跡的研究, 豊嶋編著「昭和61年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書」 1-35.
- 28) 豊嶋秋彦・芳野晴男 1989 a, 大学生における自我同一性地位の発達の变化と援助, 第27回全国大学保健管理研究集会東北地方研究集会報告書, (印刷中).
- 29) 豊嶋秋彦・松井哲郎・芳野晴男 1989 b, 卒業年次における生活体制と卒業留年, 第27回全国大学保健管理研究集会一般研究発表抄録集, 38.
- 30) 上地安昭・中丸澄子・小柳晴生 1982, 卒業留年学生の学生生活適応実態—非留年学生との比較研究, PHOENIX-HEALTH (広島大学保健管理センター年報) 19, 75-87.
- 31) 芳野晴男・豊嶋秋彦・清 俊夫 1989, 大学1年生の生活体制とアイデンティティ地位, 文化紀要 (弘前大学教養部) 29, 1-17.